JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月24日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	金沢市立港中学校	氏　名	中谷　司

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

1．青年海外協力隊の活動の様子を探る。

2．日本の資金、技術など物的援助以外の国際協力の方法を探る。

3．ガーナの子どもたちの様子を知る。

4．ガーナの人たちの生活の様子を探る。

5．訪問国から学んだことを通して、日本を振り返る。

1－2．その目的やねらいの達成度

1．私の会わせて頂いた協力隊員のみなさまは、どの人も目的意識を持ち生き生き活動していた。物質的な豊かさに程遠い生活をしていても、心は十分満たされているようだ。

2．ガーナの人たちは日本と比べものにならない貧し生活だ。トタン屋根、土壁、子どもの全員に手にできない教科書など・・・。しかし、日本人と同じくらいそれ以上に生きるパワーが感じられた。先進国の人々はここに住む人たちから、生きる価値を再確認し、エネルギーをもらっている。

3．子どもたちは日本と同じだ。大きな目に夢をつかもうとしている。勉強よりスポーツの好きな子もいる。勉強にストレスを感じている生徒もいる。ガーナの子どもたちはよく働く、手伝いをする。それが家庭の大切な役割となっているからだろう。

4．30年前の日本のような感じがした。人と人のつながりが強い（仕事、村のことを一緒になって決める。年長者を大切にする。来客を大切にするなど・・・）。

5．日本のありがたさを感じた。整備され、きれいな環境。経済的に支えてくれる政策。進んだインフラ整備・・・。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

1．大人はもちろん、多くの子どもたちが道路や畑で働き生きるために一生懸命である。たくましい。

2．時間がゆったり回っている。食事の注文から出されるまで長時間かかり、時間に遅れることも当たり前、待つ時間も仕事の１つなのだろう。だから、間違いや失敗にはおおらかだ。ストレスも少ないだろう。

3．子どもたちの生き生き輝いた瞳が忘れられない。（興味関心を持ち、夢を追う）

4．ガーナにはガーナに大切にしなければならないものがある。（生き方、伝統、習慣・・・）それが失いつつあるのが寂しい。（私から考えて）

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

1．グループ研修は様々な角度からものが見え、安心感、友情が深まった。

2．ゆとり（時間、疲労）が無い研修は健康と人間関係を崩す

3．色々な人がいて楽しかった。様々なことに積極的に参加できました。パームワインを飲み、体調を壊したときは薬や優しい言葉をいただき、英語に困っているときは助けられ・・・・。

4．ワークショップ　○○ビンゴなどはすぐ授業で使えそうです。しかし、ゆとりがないときのワークショップは・・・疲れます。(活動中は神経を集中させ、リラックスできないから)

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

1．ケープコースト城での奴隷の売買の悲惨さを生徒たちに知らせたい。文化祭でゴスペルの歌の発祥を調査し、その調査結果を全体に展示で知らせたい。

2．社会科の授業で、遠いガーナ生活は苦しくても、教科書が無くても、夢を持ち元気に生活している子どもたちの姿を紹介し、生徒たちに日本のよさを実感させ、夢に向かって頑張る力を付けさせたい。また、われわれが失ったものも考えさせたい。

3．ワークショップ国際協力ビンゴで国際協力の大切なことに目を向けさせたい。

4．知っていて知らないガーナ、ココアの実のつき方、奴隷の売買の方法、年中曇った空、熱帯サバナでありながら少ない動物、高木樹木の少なさの意外性を授業で紹介し、その理由を追及させたい。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

1．青年海外協力隊きらきら輝いている。現地に根を下ろし頑張っている。そこの地域の人たちにも感謝されている。その面は評価できる。しかし、感謝するのは協力隊員でもある。それは、自分を必要にされているから。小さな活動かもしれない。しかし、双方に価値のある取り組みと考えられる。

2．ガーナの人々のため教育、母子保健改善事業は大切な事業である。しかし、使われていないコンピューター、急激なインフラ整備にはいくつかの疑問を持った。ガーナの実態にしっかりつかんだ上での教育援助事業。地域間格差を考えた緩やかなインフラ整備を考えていく必要がある。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

1．研修計画は２ヶ月前に大まかな流れ、１ヶ月前には宿泊地は決定してほしい。

2．現地や直前での宿泊地の変更は健康とストレスのもと。

3．研修者が決まってから、準備の時間が短すぎる。予防接種を受けるには北陸では１日学校を休まなければならない。２ヶ月前には研修者を決定し、予防注射等の準備を知らせてほしい。

4．研修報告書の形式を研修へ行く前に具体的に示してほしい。帰って来てからではやる気の熱も冷めやすい。

6．その他全般を通じての感想・意見など

1．ガーナという未知の地の研修機会を与えてくれ感謝。子どもたちに伝えることも多い。

2．人はたくましい。苛酷な環境でもへこたれずに生きている。われわれも負けて入れない。

3．海外で活動している日本人はみな生き生きしている。

4．事前、事後研修とたくさんの研修の機会は授業のアイディアを生み出してくれた。土、日は疲れるが得るものも多かった。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	輸出の中心はココアである。小規模経営が中心。ココア栽培の中心は南部から北部へ移動。ココアを中心に第２次産業第３次産業へとつながらないか。 ガーナの中心産業はココア栽培。新しい産業を興す必要があるのだが・・・。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA 事務所訪問	教育関係に女性の進出が目覚しい。男、女というより１人の人として評価が進んでいくだろう。日本はまだ女性の社会進出は遅れている。ガーナの女性も家事、仕事とよく働く。その点、日本女性と似ている。ただし、日本の若い女性はそうとは言えなくなって来ている。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	言葉の要らない国際協力はスポーツだ。言葉は必要無かった。教え合い、ボールを投げる時は相手を思いやる姿があった。 小学生や中学生と交流がしたかった。そこにいた子どもたちとのサッカーをやり、簡単な情報の交換ができた。。 隊員が２代目、３代目となり野球のチーム数は増え、アクラ定着しつつある。
	JICA 専門家・隊員との交流 （8/6JICA 関係者との懇親会を含む）	隊員たちは生き生きしていた。厳しい生活に苦しみながら周りの人に助けられている。雨の日は学校へ来ない子どもたち。家での水汲みが待っているそうである。屋根の無い学校では仕方の無いことでもあるようだ。校長の家に泊まったら子どもたちに持ち物をとられたなどの色々な事件が・・・・。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	植物園には高木の樹木が多い。しかし、周辺の森には高木は少ない。2，3m のブッシュと僅かな樹木だけである。先進国と関係あるのか。 アソコンダムは周辺の４カ国に電気を供給している。経済の発達で電力不足になることも近いだろう。湖面を遊覧船が進む。16 ビートのリズムに合わせ陽気なガーナっ子が踊る。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	女性は男性以上に適応力があるようだ。男性隊員は元気な中に疲れを感じるが、女性隊員はしっかり生活に適応し元気である。JICA の職員も女性が多い。おまけにガーナ大使も女性である。 ここでも全国統一テスト（WAC）によい成績を取るのに必死である。この結果が大学進学を決定するからである。日本とよく似ている。アメリカでもそうであったが世界的に全国テストが行われている。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	元気のよい生徒たちである。表情も明るい。日本の紹介やあいさつを眼を輝かせて聞いてくれた。その後の縄跳びや綾取りなどの遊びにも一緒になって楽しんでくれた。最後は生徒たちが歓迎の踊りを踊ってくれた。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	理数科の力が弱いということで教師の研修が行われている。教えるだけでノートもとらない聞かせるだけの授業などを研修をすることにより向上させていきたいと考えている。 意欲ある教師には研修は効果があるようだが、労働に見合う給料の確保も教育の質を向上させることにつながるのではないか。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	ここの生徒は授業を集中して受けている。しかし、表情は暗い。裕福な家庭の子どもたちが多いそうである。ボールペンを使用。ガーナがボールペンをしようが当たり前（安い　手間がかからない　消しゴムが必要ないという説も）。板書も少ない。口承文字文化の影響も大きい。 授業は 12：30 に終わり、補充事業（有料）で給料の安さをカバーしているようだ。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	NPO と JICA が力を合わせてやっている事業である。保健指導を紙芝居、演劇などで行っている。娯楽の少ないため、村の人が大勢集まって楽しそうに鑑賞している。酋長が中心となり村がまとまっている。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	ここを拠点にイギリスを中心としたヨーロッパの列強が貿易を行った。ガーナの輸出品は金と奴隷。輸入品は布、金属製品。部族間の争いで破れた部族がここから奴隷として輸出された。暗く、じめじめした投獄でたくさんの人の涙土地が流された。そんな事実を子どもたちに紹介したい。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	ポリテクニックは卒業しても 50%以下の就職率。大学も 50%以下。大学との差別があるためにその格差を埋めるべく努力。それに対して学生はスト中であった。教育を支援するとあわせて、新たな産業を創出する必用がある。日本は不景気だというが、努力に応じた就業先が用意されている。
	オチェレコ・小規模潅漑農業振興計画視察	ダムを作り水稲の指導。収穫高は日本の３分の１くらいと低い。２期作を行っているがダムの水量が少ないことから苦戦。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	市場めぐりたくさんの人でごった返している。ちょっと目を離すと迷ってしまう。離れまいと神経を集中させて前の人の背から目を離さなかった。途中で立ち寄ったトイレはそれぞれの店が持っており、アパートのように並び、どのトイレも鍵がかけられ自由に入れないようにされている。公衆トイレは道路わきだ。
行き帰り	名古屋←→成田←→ロンドン←→アクラの行き帰り	狭い機内も行きは未知の地ガーナへの夢、帰りは疲れと思い出の振り返りの時間となりました。足を伸ばしたロンドンの街巡り数時間前のガーナと比べ、どこと無く冷たさを感じたのは私だけではないでしょう。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	やむ芋はサツマイモのように食べやすかった。キャッサバととうもろこしの練った団子は私にはおいしいといえないがこの地にあった食べ物に違いない。 日本が行っている資金、技術援助に疑問を持ち始めた。それは、途上国の人たちは立派な生活文化を持っているからである。それを尊重し行くことが大切だ。これまでの援助はそれを破壊し、伝統的な暮らしを踏みにじってきたようだ。そこで、途上国の人たちの健康、環境など生命に関することに限っての援助（戦争、教育、技術、最低の資金）。そして、本当に緩やかな経済協力を進めていくのはどうだろう。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月　　日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	三重県立白子高等学校	氏　名	花房範子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

1）全く知らないガーナ、アフリカについて、自らの持つイメージや思い込みを崩し、ありのままのガーナについて多くを学び、知る。

2）教員という立場から、ガーナの教育の現状についてその優れた点や課題を知り学ぶ。

3）ガーナの社会構造について、カカオ豆産業、奴隷貿易、植民地支配の歴史などを通じて知り、考える。

4）ガーナ人、ガーナ社会と日本人、日本社会の共通点について考える。

5）日本からガーナへの援助についてその事業の必要性と効果、また特に青年海外協力隊員の活動についてどのような影響と効果を与えているのかについて現状を知る。

6）現地の学校で生徒たちと交流をし、お互いを理解する。

7）多様な背景、経験をもった研修参加者同士のつながりを深め、それぞれの視点を通じて学んだことを共有する。

1－2．その目的やねらいの達成度

期待以上のものを得られたように思う。あらかじめ知りたいと思っていたこと以上に様々なガーナの側面について知ることができたように思う。というか、あまりにも事前に知らないことが多すぎたように思った。実際にガーナの都会と田舎の両方を訪れ、人々の生活環境について知ることができた。しかしながら、あらかじめセッティングされたところへの公式訪問的な場面が多かったので、どちらかというと一般の人々が普通に生活している場面に遭遇することが少なかったのが残念であった。しかし治安上の問題等もあるので致し方ないと思った。ガーナの産業については、カカオ豆のことぐらいしか事前に知らなかったが、豊かな自然資源があり、他にも期待される産物があることを知った。その他、アコソンボダムに実際行ってみて、国の経済にとっての重要度を認識した。また援助については、青年海外協力隊員や専門家、JICA 職員の方々の真摯な姿が印象に残った。人と人とのつながりが大切であるということを強く感じた。またプロジェクトについて詳しい説明と現場を見る機会を与えられ、質疑応答も自由にでき良く理解できた。

参加者同士では、お互いに持っている知識やつかんだ情報を随時出し合い、ガーナや援助事業について詳しく知ることができた。また見たものをどのように授業につなげていくかといった点においてもお互いに意見を交換することができ、見学する際も役に立ったし自分が考えるヒントとなった。

2－1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

ガーナ人の親切でフレンドリー、また元気な姿。子ども達が踊りで歓迎してくれたことなど日本と違うよさを感じた。最後の日に買い物をしているときに私のウエストポーチが開いているのを親切に教えてくれた人がいたり、空港の免税店でかばんが開いていると言って背中のリュックのファスナーを閉めてくれた人がいた。（自分の気が緩んでました。。。）何か下心があるのではと疑ってしまった自分がいたが、真に親切から言ってくださったと分かって疑った自分を反省した。

伝統文化と現代の文化がうまく融合していると思った。伝統的首長が存在しているが、決して閉鎖的な社会というわけではなく、JICA のプロジェクトなども首長との信頼関係にもとづいて村や共同体がまとまってプロジェクトを受け入れている様子が印象に残った。

多様な民族がうまく共存していると思った。言語や宗教が異なっていても能力があれば認められる社会であるように感じた。そういった意味で日本人もそのひとつとして受け入れられているのかと思った。

自分の周り、学校、地域、大きくは国をよい方向に向けるためには一人一人の努力が必要であるということを感じた。まさにそういった視点で努力をしているガーナ人の姿をみたように思う。（そうでない人もいたのかもしれないが。）

日本人の協力隊員やJICAの職員、専門家の人たちと現地のガーナ人の間に信頼関係がしっかりと築かれ、協力して事業を進めている様子を知ってうれしく思った。

女性が特に教育分野において、責任のあるポジションで活躍していることについて日本よりも進んでいると思った。

2－2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

この参加者同士が異文化理解の場であったと誰かが言ったと思うが、自分自身もそう思う。違いを尊重して集団としてまとまることの難しさと同時に多くの学びの機会を得たと思う。

それぞれの参加者の個性、専門分野についての知識、能力についてすばらしいと素直に感激することが多かった。一人一人の得意なことを出し合って現地の生徒達とうまく交流ができたことが大変よかった。参加者それぞれがこの研修をどのように授業につなげるかを常に考えていたので、お互いに意見の交換もできたし、ヒントや刺激をうけることができた。

この研修を通じて、研修に関わることだけでなく個人的な話や職場のことなども話ができた。今後も長く連絡を取り合って行きたいと思うような仲間になれたことが本当によかった。

3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

国際理解など、まだまだ「国際」と名のつくものは英語の教師の領域と思われている現状がある。現場の人たちに、多様な今回の参加者の様子などを知らせてこの分野に多くの人が取り組んでくれたらと思う。特に、自分は今年度、県内の高等学校国際教育研究協議会の事務局を担当しており、そういった場で多くの先生方にこの分野に興味を持ってもらえるように努めたい。

生徒については、自分の担当する授業、また学年の先生方と協力して話をする機会をもちたい。1 学年の生徒

たちは1学期に元青年海外協力隊の方からニジェールの話を伺った。その時はアフリカと日本との違い、貧しい面、大変な生活について主に伺ったので、今回はもう少しアフリカの多様な面について紹介したいと思っている。また、青年海外協力隊について前回はじめて学んだ生徒も多かったので、ガーナで活躍する協力隊員のさまざまな活動と彼らの姿を紹介したい。

英語の選択授業をとっている2年生の生徒たちについては、世界の問題、アフリカの歴史、ボランティアについて、援助についてなどの英文を読みながら、その事前、事後学習の際にココア産業について、奴隷の歴史や協力隊の人たちの思い、具体的な援助の例を取り上げながら、世界のことについて目をむけ、自分達の生活を見直し、生き方について考えていってもらえるようにしたい。

また地域でフェアトレードや国際協力について関わっている人達とも連携し、自分が学んだことを自分だけにとどめておくのではなく、機会が与えられれば伝える活動もしたいと思っている。

4. ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

この研修に参加するまでは援助について考えれば考えるほどよくわからなくなってきている自分が正直いたが、今回この研修に参加し、事業に関わっている日本人、ガーナ人両方が信頼しあいとても輝いて頑張っている様子をみて、大きな方向としては間違っていないと思えるようになった。

自立するためには物をあげることばかりが援助ではないとも思っていたが、学校などで、生徒たちが学ぶために絶対的に必要なもの、例えば、紙、鉛筆、教科書、図書が無かったり、学校の屋根がなかったりするという話を聞くと、施設や物資の充実も重要であると思った。冷静に考えてみると、日本にいる自分の立場でも、学校の施設設備が不十分なことは教育活動を行う上で致命的な問題であり、その改善を第一に望むと思う。しかし、授業を見せていただいたときに恵まれた学校であるはずなのに生徒がノートも教科書も使っていなかったので教科書を供給しても結局使わないのかもしれないとも思った。

優秀な人材が国内に根付かないということがガーナの最大の悲劇であるように思った。医学部を卒業した生徒たちがみな海外に出てしまうという話はショックであった。医師免許のあり方や、医者の待遇改善などにも力を入れていただきたいと思った。

教員についても研修をした先生が現場に残らないという点について深刻な問題だと思った。日本においても内地留学は現職５年以上でないと資格はない。(県によって違いがあるのかもしれないが三重県では少なくとも５年以上) ガーナでも３年から５年にまずは延ばしてはどうか。また、教員養成校のカリキュラムも問題ではないかと思った。そのあたりについて提言するようなことはできないのだろうか。具体的には教科に関連する知識を勉強する時間をもっと増やした方がよいように思った。教える技術や方法も正しい知識なしでは全く意味が無いし、現場での実習が１年もあるなら２年間は教科に関わる勉強をしたほうがよいと思った。教育制度はイギリスの制度に沿っているということであったが、教員養成についてなぜ違うのか。。。(イギリスは学部３年で一年間教員になるための勉強をすることになっているはずで、院レベルとほぼ同等とみなされているはず。しかし、これをイギリスにあわせるとまた優秀な人材の流出になってしまうかも。。。) 教育関連の専門家の方々には、欧米の制度だけでなく、ぜひ今の日本の教育行政の動きついて注目していただきたいと思った。自分も含めて案外自分の国については知らないことが多いが、今の日本の教育制度は、予算のあり方、教員の

取り扱い、等々大きく変わろうとしている。6・3・3制を弾力化しようという話まででている。また、各都道府県で教育行政や制度について全く違うことも多い。日本の教育改革や変化について評価することでガーナに提言する際に有効なこともあるのではないか。

オチェレコの灌漑農業の現場で、プロジェクトが終了したとの説明をうけたが、まだこれからも全国に広めるという部分でJICAの新しいプロジェクトが始まると伺った。自立ということを考えた場合、最終的には日本の援助なしにやっていくことが大切だと思うが、次の段階である全国に広めるという部分においてガーナに任せてしまうことはできないのかと疑問に思った。

オチェレコのプロジェクトでは現地の農家の人たちが自分たちで活動し、協同組合までつくるようになったと伺って、どのような形でかれらを触発し、行動するところまで持っていったのかもっと知りたかった。このような例が他にもたくさんあるのかどうかわからないが、もっと増えるとよいと思った。

PPAGの活動は大変すばらしいと思った。保健医療の分野はもちろんのこと、収入向上プロジェクトに関しても、どんな商品を扱うか決めることが大変難しいと思うが、女性達が扱えてしかも現地で需要が大きいパーム油という商品を扱っていることで真の自立ができていると思った。このように優秀な現地のNGOに対して資金援助するということも大切だと思った。

色々考えてみると、産業が育っておらず就職先がなかったり、国家予算が不足していたりして何もできなかったり、結局のところは「お金」の問題なのか。。。とも感じた。マンパワーの導入という点での協力隊も有効かもしれないが、資金提供して任せるというやり方も計画に沿ってきちんと物事が進んでいるかどうか確認することだけしっかりしていれば、現地が本当に求めているものを与えているという点と、自分達で物事を進めなければいけないということから将来の自立へつながるという点で決して悪いことばかりではないような気もしてきた。(実際はそう簡単ではないのかもしれませんが。)

5. 研修(事前研修等を含む)に参加して良かったことや、より良くするための提案

研修に参加して、個人では決して経験できないことができ、見る機会がないものを見ることができ、会うことの難しい人たちとたくさんお会いすることができた。 短い間にたくさんのプロジェクトをみることができた。また、JICA の職員の方々、青年海外協力隊員、専門家の方々、またヨシケントラベルの方から具体的にガーナ社会、援助の現状、活動での苦労などを伺うことができた。日本人から日本語で話を伺うことができ、効率よくまた詳しくガーナについて知ることができよかった。

小学校、中学校、高校と異なった校種の先生方といっしょになれてよかった。また教科もバラバラなのもよかった。同じ校種同士だとどうしても偏った見方しかできないと思うので今後も校種をまぜて研修をしてほしい。

移動が多かったので、よくばらずに同じ場所に2日ぐらい通うような形があってもよいような気もした。しかし、たくさん見ることの良さもありどうバランスをとるかは難しいところだと思った。

昨年度、研修に参加された先生の発表は大変有効だった。どのような心構えで研修に参加するべきか具体的にイメージを持つことができたし、すばらしい取り組みをされており刺激になった。

メーリングリストは有効であった。プライバシーに配慮して頂き有難かったが、結局 10 日間以上一緒に過ごすことになる仲間なのでメーリングリストは会う前に作ってもらっていてもよかったような気がする。そうすれ

ばお互いを知るアクティビティの時間が多少は省略でき時間の節約になる。

JICA と NIED の得意分野と役割は別だと思う。今回それがあまりうまく行っていなかった様に感じられた。事前と事後の研修で NIED の力は必要かもしれないが、現地の研修ではガーナの現状や JICA のプロジェクトをよくわかっている JICA に任せてしまったほうがよいのではと思った。参加者はある程度意識の高い人ばかりなので、事前研修で「事後報告の内容」、「研修のねらい」等々を明確にしておけば、事前事後と現地ではっきり役割分担してしまって問題ないのではないかと感じられた。現地の研修中はお互いの情報交換の時間を確保していただければ十分であるように思った。

写真の共有化の提案はありがたかった。

マナビノオトは行き先ごとにページを作っていただき、一日ごとの予定も書かれており大変役に立った。

6. その他全般を通じての感想・意見など

まずは、このような機会を作ってくださったすべての方々に感謝したい。また、現地では大変お忙しい中空港への送迎から交流会のために時間を作ってくださったり、同行したりしてプロジェクトの説明などしてくださった JICA ガーナ事務所の方々には感謝の気持ちで一杯である。訪問先においても、私たちの訪問の意図などをよく理解していただいており、丁重に扱っていただき大変ありがたかった。一方で習慣や礼儀などがあまりよくわからず、先方に不快な思いをさせたのではないかと不安に思った。

この旅行中は病院へ行くほどの大病になるメンバーも出ず、自分も元気に研修を続けられてよかった。不安もあったが、宿泊先など配慮していただいたおかげだと思う。しかし、あまり調子の良くなかった人にとっては本当にきつかったと思う。会計の係りの方は慣れないドルからセディという単位での計算、本当にお疲れ様でした。すっかり支払いなどを人任せにしてしまったので、結局現地の物価が今一わからずに終わってしまったように思う。

時間の観念については、私達日本人がこだわりすぎなのか、ガーナだから仕方ないですべて済ませてしまう問題なのかよくわからなかった。訪問先の人たちを待たせることを何度もしてしまい、申し訳なく感じた。ポリテクの副校長が時間を守ることはすばらしいと言ってくださったことを思うと、ガーナだから仕方ないではすませられないのではないかと思った。

子どもたちに日本の学校の説明をしたが、どう感じたのか尋ねる時間がなかった。どのように感じたのかぜひ聞いてみたかった。交流に夢中になってしまい、生徒の生活や考えていることをゆっくり聞かずに終わってしまった。

行く前はガーナについてほとんど何も知らなかったのに短い期間にたくさんのことを学ぶことができたし、ますますガーナに対する興味も沸いてきた。今後ガーナという国名を聞くだけでも気になるだろうと思う。

ちょっと困ったこととして、オチェレコの小学校に連れて行っていただいたときに、子ども達に「日本のことを知っていますか？」と質問したときに生徒が何も答えなかったら、先生が「生徒が知らないのは本がないから本をくれ」というようなことを言った。持っていた英語で日本紹介をしているパンフレットを一冊わたして、「先生が読んでみんなに教えてください」と言ったら不満げに「これでは足りない」といわれた。「すいません。」とあやまって図書はあげられないと断った。仕方がなかったと思うが、日本の NGO がトタン屋根を寄贈したこと

など考えるとどうすべきだったのかわからなくなった。また、学校へおみやげとしていろいろなものを持っていったがあれでよかったのか。みんなで色々考え、問題にならないように渡し方や数なども配慮したつもりではあるが実際のところどうだったのか気になる。

事前の準備をするのに、研修、連絡などあと１週間ずつ早ければと思うことがしばしばあった。具体的には、黄熱病の予防接種など、必要だとわかっていることなので派遣が決まった時点ですぐに連絡をして欲しかった。一週間に一度しか予防接種ができる機会がなく、急に言われても仕事の調整が難しい。また、何をどう学ぶかという研修が大事であることはよく理解できるが、実際参加するものとしては、初めてアフリカに行くことで不安のほうが先に立ち、学びについて落着いて考えられないこともあったのではないかと思う。また家族にたいする説明、職場に対する説明も必要である。具体的な旅行の準備に必要な説明（吉田さんからの話など）に時間をもっととって欲しいし、もっと早くしてほしかった。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	テマ港はガーナで一番大きな港であり、約７０％のココア豆がここに集められる。農家から出荷、農協などで集められたココア豆が一袋約６４キロの麻袋に入れられ、トラック一杯にのせられここに集められる。トラックから降ろして倉庫に入れるのはひとつのチームが１６人の男性が２時間ほどかけてトラック一杯分の袋を倉庫に運ぶ。彼らは運ぶことを仕事にしているそうだ。ここで重要なポジションについている人達は豊かな生活をしている様子が乗っている車などから感じられた。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA事務所訪問	Ghana Education Serviceは、前高等教育（就学前、初中等教育および教師教育）にかかる政策および計画の実施をになう１０局を有する。ガーナでは政策を立てる教育省とは別に、教育政策を実行するのはEducation Serviceである。基礎教育の無償、義務化を２００５年までに行う計画であり、また２０１５年をめどに１００％の就学率をめざしている。副総裁の話では、ガーナの教育で現在最も力を入れるべき課題は、教室確保、教科書の不足、教師の確保と質の問題であるとのことであった。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	山口隊員で野球指導のために日本から派遣された協力隊員は４人目となる。アメリカからも指導者が派遣されているということであった。６年前まではガーナ国内で１チームしかなかったクラブチームが現在では２５に増えている。運動能力が高い選手が多く、指導者派遣が始まってからガーナ野球の実力は上がってきているという。山口隊員は技術面の指導だけでなく、時間を守ること、グランド整備、生活面の指導もしているという。技術と精神面で指導者としてやっていけるような人材も育ってきているということであった。子ども達が他の友だちはみんなサッカーをしていて野球をする子はいないと言っていた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/31(土) アクラ	JICA 専門家・隊員との交流 （8/6JICA 関係者との懇親会を含む）	現地でどの隊員の方も、職員の方も誇りをもって、またガーナでの生活を楽しみながら活動を続けているように感じた。8月6日の懇親会で職員のかたから、ガーナではカカオ豆からチョコレートにまで加工している会社はひとつだけしかないということを聞いた。そこまで品質管理ができ技術のあるところはなく、結局ほとんどは原料で輸出しなければならないということであった。その唯一の会社はロッテから技術の指導をうけているとここことであった。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	アブリ植物園では薬となる植物の研究もしているということであった。ガーナには豊かな資源があることをここでも実感した。アコソンボダムを訪れ、世界で2番目に大きい人口湖というヴォルタ湖の一部をみた。国内の4分の3の電力をまかなうともに、国外へも電力を売っていると聞いた。西アフリカでも比較的豊かなガーナの面を知ることができた。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	大規模高校だった。生徒たちはお金がたまってから入学する場合もあり、すでに成人を迎えていたり、年齢が異なる生徒が一緒に在籍する。学校には青年海外協力隊の小浜隊員が派遣されていた。理数科教員の不足も問題であるこの学校では貴重な存在であった。学校では教科書の不足や図書館の図書の不足、時々起こる停電に悩まされていた。午後からの試験をうけるために教室で待機している生徒達の様子を見ることができた。びっしりと書き込んだノートをみて最後の復習をしている姿は日本と同じであった。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	小規模校であった。生徒たちはひとつの教室に椅子を持ち込み、机の上にすわったりして私たちの話しを聴こうと集まった。狭い教室で寄り添うように椅子や机に座って真剣に私たちの話をきく生徒たちの姿が印象的であった。日本の学校生活、および町の様子などについて写真をみせながら紹介した。そのあと何か質問がないかと生徒達に尋ねると、一人の男子生徒がどうしたら日本に行くことができるかと尋ねた。私たちのほうからは、とにかく一生懸命勉強してください、まずはタニベの高校を卒業し、勉強して奨学金をとってくださいと返事をした。これが期待していた答えだったのかどうかはわからない。連れて行ってくれという意味のこもった質問だったのかもしれない。ちょっと苦笑いしているようなその生徒の顔が忘れられない。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	教員養成校の歴史の深さに驚いた。理数科プロジェクトを最初に受け入れた点と言い、盲学校の先生の養成もしており、9月より教員養成大学に昇格する予定でいるなど、国内の養成校のなかで先進的な役割を果たしているように感じた。
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	小学校の4年生の授業を参観したが、生徒が真剣に話を聞いている様子が印象的だった。先生も指導案を用意され、この養成校の教育がきちんとされている様子を感じた。授業中、生徒はノートもとっておらず、教科書も見ておらず、大事な用語は繰り返し声を出して覚えている様子であった。ここの学校は先生の質もよさそうであったし、生徒も比較的恵まれたものが集まっているように感じた。国内の学校間格差はかなりあるのではないかと思った。生徒に対するしつけの面は日本と同じような状況であるように感じた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	タラソ・アミ村の巡回の様子を見学した。村の首長との信頼関係の上でPPAGがこの村で活動できていることを実感した。国のかわりにこのNGOがこの地域の保健衛生を担っているが、ここでも女性の活躍が目に付いた。子ども達が住血吸虫病にかかっていないかの検査や、乳幼児の予防接種、身体測定、女性達に対する性病について注意の話などがされていた。また村人たちがつくった劇団によるAIDSや10代の妊娠をテーマとした劇が行われていたが、ガーナ人自身、また現地の村人たちが自分達の問題に取り組んでいる姿は見習うべきことが多いと思った。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	ケープコースト城では奴隷としてつれてこられた人々を閉じ込めておいた牢がそのまま保存されており、実際に入ることができた。大変な環境で閉じ込められていたことが実感できた。これらの砦はヨーロッパ各国の争いにより何度も違う国の統治下におかれた。また奴隷は各部族間の争いのなかで捕らえられた者たちであったという。現在は異なる部族がうまく共存して平和であることがとても貴重なことに感じられた。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	私達はここで久しぶりに約束した到着時間より５分ほど早く到着した。迎えてくれた先生方からその点についてほめられたことは驚きであったが、早く到着できて本当に良かったと思った。学校の生徒たちが十分な教材（スケッチブック、鉛筆など）を買うお金が無くて困っていることを聞き、心が痛んだ。また卒業しても就職先もあまりないとのこと。しかし、先生方はこの学校に誇りをもち、より質の高い教育をして質の高い生徒を育てようと頑張っていることが感じられた。生徒の負担を減らすために大使館から依頼された商品を作成していた。
	オチェレコ・小規模潅漑農業振興計画視察	灌漑設備を整え、稲作をしているオチェレコ村を訪れたが、村人たちが自分で農業共同組合をつくり、運営していたことが印象にのこる。WAOという名前のワークショップを続けてきてこのような段階に至った。70年代にあった国からの援助が止まりかえって自立への意識がたかまったように思った。農協には村人たちが自ら考えてさまざまな委員会を設置している。ガーナの母系社会を反映してここでも農協の登録者全１３１人のうち４３名が女性会員であったことも興味深い。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	7月31日に訪れたマーケットはアクラ最大ということでものすごい活気であった。ガーナには多くの中国人、韓国人が在住しているということで、「Japanese」とも言われたが、「Chinese?」と声をかけられたこともあった。また「チンチョンチャン」という言葉もかけられた。中国語の書いてあるダンボール箱が店においてあるのも見かけた。 野口英世研究室は日本語の石碑などがあり不思議な感じがした。研究室は今も使われているということだった。
行き帰り	名古屋⟷成田⟷ロンドン⟷アクラの行き帰り	途中のロンドンで大変限られた時間であるが、ビッグベンや国会議事堂、ウェストミンスター寺院、トラファルガー広場、大英博物館を見学した。これまでの見慣れたガーナの風景と打って変わって巨大な建築物に圧倒された。これが、ガーナを植民地として支配していた国であったと思ったらまた見方が変わってきた。また大英博物館ではエジプトから持ってこられた遺跡の数々、ミイラなどを大急ぎで見たが、ここでも支配する側の圧倒的な力を感じた。

JICA教師海外研修　報告書

提出日	平成16年8月22日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	名古屋市立自由ケ丘小学校	氏　名	松　川　弥　生

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

1　自分探し…ガーナで心も体も開放し，今までの価値観にとらわれず，いろいろなことを見たり聞いたりして，その全てを吸収して一回り大きな自分になる。自分がスタンダードではない。

2　ガーナを知る…ガーナのありのままの姿を知る。思い込みではなく，ガーナを正しく伝えるために，文化，自然，人々など多面的に見て，よいところや問題点などを知る。

3　広い視野のために…将来をこれから考える子供たちのために，ガーナで活躍する日本人の方から話を聞き，日本について，自分について考える機会とする。

1－2．その目的やねらいの達成度

1　無知な自分といつでもどこでも寝られる自分を発見した。困ったとき，どうしてそうなのかなと考えるようになった。ガーナの伝統的な文化に触れたとき，ガーナに溶け込んだ気がした。

2　つい，貧困層に目を向けがちだが，立派なリゾートホテル，おしゃれを楽しむ人々など知らなかったガーナの姿に出会えた。訪問先では，よいところや問題点など質問にもしっかりと答えていただき，知りたかったことを知ることができた。

3　青年海外協力隊やJICA関係者の方に話を聞くことができた。ご自身が小学生や中学生の時の気持ちを話してくださり，日本の子供たちが「外国にはこんな日本人がいるんだ。」と感じてくれるだろう。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

人々がとても素直で受け入れてくれる優しさをもっているということ。私たち外国人に対して，恥ずかしながらも真っ直ぐな瞳で手を振ってくれる子供たち。予定が大幅に遅れ，訪問先への到着が随分と遅くなっても，笑顔で迎えられ，丁寧にお話をしてくださり，すごく歓迎してくださっているのが伝わってきた。ガーナでは，怒っている人を見た記憶がない。私たち日本人は，どちらかというと感情表現が苦手なほうなので，「招いてくださってありがとう」という気持ちを素直に表現することも大切だなと感じた。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

初対面の方とガーナを研修するということで，出発前は不安に思っていたが，何も心配することなく，自分らしく過ごせたのは，皆さんのお陰だとすごく感謝している。簡単な役割分担だけで，それぞれの持ち味を生かして，訪問先で楽しませる方，陰で支えてくださる方と自然と役割があり，一つにまとまっていたように思う。年齢，性別に関係なく，参加者全員が対等に楽しく研修に参加できたことをとても大切に思い，嬉しく思っている。集団で何かをする時，自分には何ができるか，どんなことでみんなの役に立てるかを考えようと思う。参加者やの方の行動力と気遣い，豊富な知識に尊敬した。

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

ガーナで感じた人々の友好的な態度は，自分も人に接するときには忘れないようにしようと思う。その上で，自分が見てきたガーナの様子を，子供たちや職場の方たちに紹介し，ガーナという国を通して世界を知るきっかけとしたい。特に子供たちには，民族衣装や民族楽器，写真などを見せたり，学校の様子，地域保健総合改善プログラムの様子など，子供たちにとって身近な場面を取り上げたりして，ガーナを知らせたい。これをきっかけとして，世界のいろいろな国に目を向けるようにしたい。また，JICA のプロジェクトや青年海外協力隊の方の活躍をも知らせることで，「援助」について子供たちと考えてみたい。協力隊の方のインタビュービデオを見せたり，元協力隊員の方を招いて話をうかがったりして，子供たちが将来を考えるのに少しでも視野が広がればと思う。世界の中の日本を知り，日本のよさに気づき，自分にできることを考え，日本や自分を好きになるような子供たちに育つよう，自分の経験を生かしたい。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

学生時代から興味があり，青年海外協力隊の説明会に行ったり，経験者の話を聞いたりしたことはあったが，今回初めて実際の現場を見せていただいた。どの現場も現地の方と一体となって援助を進めており，地元の方に溶け込んでいるという印象を受けた。現地の方が必要としている援助ほどうまくいき，成果をあげているという印象があったので，現地の方が必要としていることが何かということが大切だと感じた。残念なことに，私の周りでは，JICA という言葉や青年海外協力隊という言葉を知らないという人がいる。もっともっと宣伝していただいて，知名度を今以上に上げていただけると嬉しく思う。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

個人では訪問することができない大使館や教育省，学校や，プロジェクトの現場を見学し，話を聞くことができ，とても貴重な経験をすることができた。協力隊員の方の実際の活動の様子を見たり，仕事をされている方の話を聞くことで，生きた情報を子供たちに伝えることができる。現地の方がたくさんの話をしてくださるのだが，通訳があまりされないときがあり，内容を理解するのに困ったときがあった。訪問先によって違ったのだが，専門家や協力隊の方が通訳するのか同行の現地添乗員がするのか，参加者がするのかはっきりとしておいたほうが研修の成果が上がると思う。また，今回の研修では時間が遅れるなど予定を確認・調整する必要があったのだが，その時の対応を誰がするのかはっきりさせておく必要があると思う。

6．その他全般を通じての感想・意見など

この研修では，二度と経験することのできない貴重な体験をさせていただいた。この経験を教育現場だけでなく，自分自身の生き方にも生かしていきたいと思う。訪問先で学んだこと以外で私が一番印象に残っているのは，ニューアブリ PPAG 地域保健総合改善プログラムを視察したとき，初めに伝統的酋長さんに伝統的なあいさつを交わし村に入ることを許されたことである。テレビでしか見たことがないような光景にとても感激した。村の大きな木の下で村人が集まり，検診や保健指導を行っている様子に感動した。その国や人々のよさを大切にしながらかかわっていくことが一番大切なことなのだろう。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	カカオ豆が木の幹から直接生えている状態にまず驚いた。国中のカカオ豆が輸出のために集まってきたその量は想像以上でだった。大きさの選別や品質チェックなどをして，防虫対策（薬）をしっかりと行い，輸出される。薬をしっかりと散布しているので，虫はいませんと自信もって言っていたがかえって心配になった。品質のよさを強調していた。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA事務所訪問	ガーナでは毎年，日本から人が集まりよさこい祭りを開催しているそう。日本とアフリカが身近に感じるようなお話がうかがえた。教育省では，ガーナの教育システムや問題点などの話を聞いた。私たちの細かい質問にも丁寧に答えていただいた。JICA事務所では，ガーナにおけるJICAプロジェクトの概要，海外研修に寄せる期待や支援をお聞きした。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	国のスポーツ予算の95パーセントがサッカーに使われるということだった。野球はまだ人気のスポーツではないが，隊員の努力により，テマではすっかり根付いている様子がうかがえた。努力をしても，財政的な問題で国の代表として大会に出られないという問題を耳にした。
	JICA専門家・隊員との交流 （8/6JICA関係者との懇親会を含む）	寄生虫駆除を行っている古閑さんからは，JICAとUNICEFなど他機関との関わりやアフリカの衛生面の現状など，質問に丁寧に答えていただき，貴重な話がうかがえた。シニアボランティアの方からは，年齢に関係なく希望と夢を持つことの大切さを感じ，日本の子供たちにこんなにすてきな日本人がガーナにいることを伝えたいと思った。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	植物園では，日本では見られないような植物を間近で見られた。観光地であるのに，ごみがたくさん捨てられているのが気になった。外国人の入場料は，ガーナ人の4倍。ブチ滝には，祭祀の囲いがあり人々の信仰心の深さを感じた。アコソンボダムは，アメリカとイタリアの出資による。発電機械は日本。近隣3カ国を含む4カ国の電力を賄う。日曜日には観光遊覧船のようなものが出ていて，バカンスの場ともなっていた。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	ケジェビ・アサト高校では，教頭先生はじめたくさんの先生方に迎えられた。モデル校に選ばれていて，建物も立派であった。たくさんの生徒を収容できるようにするため，拡張工事を行っていた。学校の自慢や問題点，生徒の進路やアメリカ・日本からの援助について私たちの質問に答えてくださった。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	生徒数180人の小規模校で，生徒が残ってくれており，日本紹介，折り紙，縄跳びなどの交流をすることができた。先生は，図書室に本が欲しいとおっしゃっており，私たちからの援助を期待しているようだった。日本の学校と交流がしたいということらしいが，交流＝援助という意味があることもあると後でJICAの方から聞いて，複雑な気持ちになった。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	郡の教育長が女性の方ということで驚いたが，こちらでは珍しいことではない。性別や宗教に関係なくこのような地位についている。教員の力量向上のため，現職教育に力を入れている話をじっくりとうかがった。3か月の完全有給産休により，女性教員がやめなくなったという話も。教育長の「経験を共有したい。日本から学んだことを生かすし，郡の思いも日本に持ち帰って生かしてほしい。」という言葉が印象的だった。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	ガーナで最も古い学校ということで，校長先生から誇り高い話がうかがえたが，教員は望まれた職ではないというのが現状。小学校では，アルコールランプを使った授業を見せていただく。その後，縄跳びやけんだま，折り紙などで小学生と交流。写真などを置いてきたが，日本のことをどれだけ知ってもらえたか気になる。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	月１回の巡回検診を見学させていただく。乳幼児の身体測定や栄養指導，尿検査，予防接種などを行っていた。十代の妊娠をテーマにした演劇やエイズについての紙芝居も。地元の活動をJICAがファシリテートし，うまくいっているということで，活動している方がやる気をもって生き生きと活動している様子が印象的だった。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	奴隷貿易の拠点となったこの城には，当時の男性奴隷，女性奴隷専用の牢が残されており，当時の様子を聞きながら，ガーナの歴史を感じた。アメリカに渡った奴隷の子孫の遺体が，同じ道を通ってここからガーナに帰ってきたという。今では，人々の心にはどのような感情があるのだろうか。小学生には扱いにくい題材かもしれない。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	生徒はストライキ中でいなかったが，大使館から発注された鳴子を卒業生らが製作していた。半田隊員から苦労ややりがいなどを聞きながら，作業場を案内してもらう。半田隊員へのインタビューは，ガーナでの生活，青年海外協力隊は小学生のころからの夢だった話をうかがえて，日本の子供たちのへのとてもよい教材となった。
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	政府による農業政策だけでなく，住民も農業協同組合を作って主体的に運営している。以前は年１回の収穫だったのが，数回の収穫が可能になり，収入が安定したという。バナナの木と水田が共存する不思議な光景だったが，昨年，米作りについて学習した日本の子供たちには，わかりやすく，よい題材になるかもしれない。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	マーケットは，非常に活気があり，はぐれないように前を見て，穴に落ちないように下を見て歩くのが精一杯。野口英世研究室は，残念ながら中には入れなかったが，今でも研究室として使っているということだった。トレードフェアセンターでの買い物は，民族楽器や民族衣装などを中心に子供たちへの実物教材となるようなものを買った。
行き帰り	名古屋←→成田←→ロンドン←→アクラの行き帰り	ロンドンは思った以上に，インド系の方や黒人の方が多く，驚いた。飛行機の窓から見えるアフリカの景色は，思ったより電気がついており明るかった。ロンドンは古い建物を上手に残し，すばらしく美しい町だった。イギリスとガーナ，奴隷貿易の話を思い出し，複雑な心境となった。日本に帰ると，目の前を建物でさえぎられ，視界が狭く感じた。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	ガーナ２番目の都市クマシは，とても都会的な雰囲気があった。アクラよりも都会に感じた。大きなバスターミナルにカラフルなバス，鉄筋コンクリートの大きな家，人々もたくさんいて活気があった。アフリカという日本とは何もかも違う場所を訪れ，その貧しさに目を向けがちだが，そうではない現実をもしっかりと子供たちに伝えなくてはと思った。逆に，貧困層の生活の現実ももう少し知ることができたらと思った。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月20日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	静岡県島田市立島田第三小学校	氏　名	渡邉　三知子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

①ガーナ国をこの目で脚で観る。

②途上国としての課題（教育、経済状況、女性問題等）と課題に対して何を諸外国に期待しているのか。

③ＪＩＣＡ事業及び青年海外協力隊員との単独インタビュー。

④現地の子供たちとの直接交流（遊んだりインタビューしたりと自由な時間）。

⑤女性問題

⑥環境教育

1－2．その目的やねらいの達成度

達成度の度合いについては、基準をどこに定めるかで変わってくると思われる。短期間での研修なので、⑥40%①②60%④⑤70%③90%でしょうか。特に、時間的なゆとりがなかったため、質問にも限りがありなかなか本筋までには至らなかったことにも要因がある。しかし、期間を考えれば要求度が高すぎたかもしれない。このガーナでの得た知識を媒介にしながら、今後の活動に活かしていくならば、９０%は達成したと思われる。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

気づいたこと

・押し寄せる近代化の波と田舎との違いの度合い

・働く女性の姿と軒下に並ぶ男性の姿から女性の存在

・服装（女性のファッションセンス、人々もバスから見る限り皆きちんとしている。）

・宗教（日曜日の礼拝、来訪者への姿勢）

・大人の子供に向ける姿勢（厳しい）

・インフラの不備からくる生活状況（病院、家屋、学校、道路等）

・働き手の子供

・近代化が生んだ路上のゴミ

・やぎの放し飼い

・時間の観念

・経済の成長と物価の安さ

・電力と水

大切に思ったこと

・ガーナの国民性（陽気で明るい笑みからでる挨拶）

・宗教への崇拝姿勢

・学歴社会の中でより高い水準をめざそうとする姿勢

・JICAの協力が人を育てることの着実かつ確実なる定着

・青年海外協力隊員のたくましさ

・ガーナの歴史（植民地時代以降の国内の安定）

嬉しかったことなど

・イースタン州の集落に視察に入れたこと

・私的には絶対視察できない機関を視察できたこと

・大使館公邸に招かれさまざまな方（ガーナの方）と話ができたこと

・子供たちの素朴な感覚（小学生、高校生との交流）

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

・参加者同士お互いが声を掛け合い協力し合うことを学ぶ。

・スケジュールが少し立て込んだ時に互いの気持ちを言い合えたこと。それに対して伴さんの冷静な対処のしかたを学ぶ。

・ＪＩＣＡスタッフ稲生さんの豊富な世界情勢から学ぶ。

・参加者一人一人の個性から自分を見つめ直すことを学ぶ。

・飛行機に弱い私への支え（参加者、伴さんのマッサージは心身共にリラックスできました。嬉しかった。）

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

＝教職員に対して＝

・ガーナ国について教職員に伝達し世界に目を向けていく。

・ＪＩＣＡの事業や活動を知らせていく。

・ガーナの教育制度から日本の制度を見直す視点から

＝子供たちに＝

・ガーナと日本のつながり

・アフリカのガーナという国そのものと途上国としてのガーナを伝える。

・ガーナ国を通して世界の文化（国旗、世界遺産、住居、食べもの、衣服、道路事情等）を知る。

・ガーナを通して平和や貧困、飢餓について学ぶ。

・ＪＩＣＡの活動を伝える。（支援というだけでなく）

・青年海外協力隊員の活動について大変というより夢、種として伝えたい。

・地域保健総合改善プロジェクトから保健衛生や福祉活動へとつなげていきたい。

・稲作農業の違い（気候、地域等から）

・偉人野口英世から生き方を学ぶ。

・ガーナの特産物（カカオ豆）から各国の輸出入と日本との違い

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

今回の研修視察は、ほんの一部であり、その一部を見せて頂いたことで感想、提案は難しい。しかし、入り口の部分のみとして述べるとすると、

・教育のように長いスパンで効果が現れてくることと、保健改善や女性に対する生活向上支援、灌漑小規模農業振興支援等は目に見えて効果が現れているものとあるが、ＪＩＣＡの活動が確実かつ着実なる成果を上げていることに感動した。この素晴らしい活動が、我々の伝わっていないことに（自分も含めて）ＪＩＣＡの宣伝不足を感じ残念に思う。

・ガーナ国の状態を見るに、この国への支援は必要か必要でないか、あるいは幸か不幸かを論じた時に、ＪＩＣＡの活動の理念である人を育てていくことで、この国は今の文化を継承しつつ向上していくのではないかと思った。しかし、長い歳月をかけてのことであり、大変かつやりがいのある国であると感じた。

○ＪＩＣＡの活動を宣伝。具体的には、開発教育等で宣伝はしているものの、一部しか参加していないことやそれが個人レベルで留まっているのではないかとも思われる。

○ガーナの進む学歴社会と産業開発の遅れからくる歪み。より高い人材を育てても海外に流出してしまう優秀な人材。この繰り返しが続く限りガーナの進展は時間がかなりかかると予想される。（素人考えで）人を育てるＪＩＣＡの方針は素晴らしいことであり継続の必要性は大であると思われる。その育てた人材が国を造っていくとするならば・・・と考えるのは、入り口しかかいま見ていないことからの発想でありすみません。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

○国際理解教育とは・・・で研修したことで以後の研修への姿勢が変わっていった。

○参加者とかなり親しくなるアクティビティを取り入れてくれたのでよかった。

○ガーナ大使が「アフリカを知らない者は、視野が半分しかない人である。」という点からも今回の研修は絶好なチャンスであった。

○私的旅行では味わえないコースを視察できた。

○強硬なスケジュールであったものの、見るべきもの・ことがあったので感謝、感激であった。

△視察内容は、良かったものの時間的にゆとりがなかったため、現地でのふり返りの時間が持てず、次の日へのステップが弱くなっていった。

△ふり返りができることで、次の日の研修で活かされることや要望が出てきたのではないかと思われる。そこから、研修内容も自己研修へとつながっていったのではないかと推察される。（後半でお互いに研修したいことを事前に打ち合わせていったので。）

△事前研修の打ち合わせを早い段階で計画されていたら、準備も余裕を持ってできるのではないだろうか。

6．その他全般を通じての感想・意見など

・自己研修不足のため、現地での研修の深まりが低かった。

・マラリアの防止に異常なほど終始しした。予防については、当然のことかもしれないけれど、面前での行為が多くの人に違和感を与えたのではと、マナーという点でどうであったか？という反省を持った。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	・カカオ豆から世界に目を広げる。 カカオ豆からできるチョコレートの味比べからこの国を知る。 ・カカオの実のなり方から植物の様々を知る。 ・カカオ豆で貿易ゲームを通して貿易の仕方や互いの立場を体感していく。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA 事務所訪問	・大使館表敬訪問から日本とガーナのつながりを知る。大使館の役割。 ・ＪＩＣＡの事業と役割について教職員に伝える。 ・学校へ行ける子、行けない子、行きたい子、行きたくない子、世界には学校へ行きたくても行けない子がいるどうしてだろうか？世界の学校について知ろう。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	・野球とサッカーからスポーツを愛する心、貫く気持ちを考える。
	JICA 専門家・隊員との交流（8/6JICA 関係者との懇親会を含む）	・ＪＩＣＡの事業や活動を通して国際協力って何？につなげていく。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	・４０％のガーナ事情を知ることで、自分たちの生活をふり返り、資源をどのように扱っていくことが大事かを考えてみる
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	・青年海外協力隊員の活動とその生き方を伝えることで夢を志しを持つことの大切さを指導する。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	・ケジェビ、タニベ、アクロポンの子供たちの様子を知らせる。また、その中でトーキングドラムを聞くことで、その国の文化を知る。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	・ガーナの教育システムについて教職員事情を知らせる。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	・交流の様子を知らせ、子供たちの将来の希望や思いをふり返ってみる。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	・乳幼児死亡率から命について考える。 ・地域保健改善計画活動の様子から保健衛生を考える。 ・パーム油と私たちの生活のつながりから学ぶ。 ・この村のしきたりや歓迎の踊り伝統を知る。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	・世界遺産から学ぶ。 ・奴隷貿易から歴史的背景を見る。奴隷の売買されていたことを通して、人間を道具のような扱いが許されないということをロールプレイで体感する。身近な人との関わりを見直していく。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	・インタビューから青年海外協力隊員の生き方に学ぶ。 ・インタビューからこの国の経済状況を知り、支援として自分たちで何ができるか考える。
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	・熱帯地域の稲作農業を知ると同時に日本の稲作との比較から日本の稲作農業のすばらしさを知る。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	・野口英世から生き方の指導をする。 ・アクラの商店街の様子と私たちの町の様子から何が違ってどうなっていくことが必要なのか？
行き帰り	名古屋←→成田←→ロンドン←→アクラの行き帰り	・空港では、日本人は、少数派。少数派、多数派（自分を取り巻く環境が変わったときの思い方） ・ガーナと日本の距離を地球儀から知る。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	・ガーナの学校事情と日本の違いから自分たちの置かれている立場を知ると共に、本当の幸せとは何かを考える。 ・労働源になっている子供から自分の立場をふり返り、自分たちとの生活との関わりにつなげていく。 ・異文化との出会いと不安から自分をふり返る。 ・全く知らない者同士が共に旅行をすることを通してお互いをどう理解し受け止めていくかをゲームを通しながらコミニュケーション力をつけていく。

JICA教師海外研修　報告書

提出日	平成16年8月25日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	金沢市立大徳小学校	氏　名	今井由美子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- 現地の人とふれあうことにより、理解を深めること。
- 視察で見たこと感じたことを伝えるための方法をさぐりながら、資料となる素材を準備すること。

1－2．その目的やねらいの達成度

- チャンスを見つけては、マラウイの人に話しかけるよう心がけた。また、ホームステイにより、実際の生活を体験でき、現地の人々と温かいふれあいができた。
- たくさんの素材が得られた。その活用法をこれから検討したい。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

マラウイの人々の生き方、考え方を生活の様子から感じることができた。彼らはこのままでもよいのではないか。いいのさ。というのは簡単だが、先進国は、マラウイの将来に責任を持って、決して不幸にならないように援助していくべきだと思った。美しい自然を守り、新たな文化を育てること、両立は困難な面も多いが、大事に考えていくべきであろう。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

マラウイ協会で活動し、事前に十分調べて参加された方。行動的でいろいろな国、いろいろな人々と進んで交流されている方々。カメラを通して美しい自然や生き生きとした人々を表現する技を持つ方。マラウイの抱える問題を専門的で広い視野から捉え私たちに提示してくれた方。マラウイ人の音楽性の優れた面に気づかせてくれた方。等々、今回も研修でそういう仲間たちの生き方に大いに刺激された。

3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

自分自身がわくわくしたこと、驚いたことをそのまま伝えたい。国際理解の授業の難しさという点で、伝えたいことがなかなかうまく表現しきれない、理解してもらえないということを今までの実践から感じている。

資料を効果的に使って伝えることが、子どもたちのアフリカという地域への理解につながると思う。

4. ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

２年間という任期の前半は現地の人にわかってもらえず、ひたすら実績を作って受け入れてもらうことに費やしている様子や、また、優秀な現地スタッフ（ムテア氏、チア・レディー等）の力で村の人々をまとめていった様子などを見ると、現地の人を日本で研修させ、隊員とペアで事業に当たっていった方が２年間を有効に使えるのではないか。研修のために、野外映画会等のメディアを利用するなども効果的では？

5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

メンバーと仲良くなれたことがうれしい。これからも開発教育の分野で情報交換したりして、交流を続けられたらと思う。

毎回のワークショップは、自分たちの考えをまとめるのにはよかったが、研修全般として、もっともっと正しい情報が欲しかった。実際に授業をするときに知識不足で不正確に伝えてしまうことや、自分だけの誤った思い込みを伝えてしまわないかということを不安に感じている。隊員の方々や現地スタッフの方と、もっと話し合う時間がとれたらよかった。

6. その他全般を通じての感想・意見など

心残りは、ＨＩＶの孤児院を訪問したかったなあという点。主に学校や農業関係の視察が多かったが、医療・保健の分野も見たかった。

帰国後、周りの人みんなに羨ましがられました。こんな機会を与えてくださり、いろいろお世話いただいたＪＩＣＡの皆さんに感謝いたします。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学視察	教員養成のためにカナダ、ＵＳＡが大きな援助をしている。学生も政府の援助を受けている。教育の普及のためにという緊急性を感じる。ただ、トップレベルの大学教育については、（この国にどれほどの需要があるのかはわからないが）国内のレベルでは難しいのではと推測してしまう。
	小学校訪問と交流	Community による学校教育では、地方独自の伝統文化がいかされている。また、HIV 劇を演じる生徒も真剣でそれを見守る村人たちも温かい。村にとって、学校という存在は大きいと感じた。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	マラウイの人のそれぞれの内面と触れ合って、信頼関係を築いていった大溝さんの生き様が胸を打つ。人間同士としての援助の本質を見せていただいた。
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園ツアー（野生生物）	わずか二・三十年前には、このような保護のあり方は、アフリカにまだまだ広がっていなかっただろう。貴重な野生動物たちにとっても、生きやすい環境作りが大切である。
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発調査（Tilime 村、Tikorele 村、Mank-hamba 村視察	こんな荒れた土地をよくここまでにというのが感想だ。村人たちの誇りに満ちた表情が印象的である。ただ、こんな簡単な技術をなぜ自分たちで考え出せないのか。マラウイ人は不思議だ。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会（隊員との昼食会を含む）	隊員たちが感じるマラウイ人の特性の中に、のんびりとして、日常を楽しむということの反面、したたかでお金にシビアーという点が出されたが、ツアーを続ける中で少しずつなるほどと実感できた。しかし、それは彼らにとって生きていく上で当たり前のことなのだが、人懐っこいふだんの様子とのギャップからちょっとがっかりもしてしまう。
	マーケット見学	朝市のような露天の市場。品物の流通はどうなっているのだろう。仲買人などもいるのだろうか。みかんがおいしかった。古着の数は多いが、生活必需品を含めて、品物の種類がとても少ない。生活のレベルがここからもわかる。
	現地人宅へのホームステイ	会話の好きな家長は、客人のために最大級のもてなしをしてくれた。女の子は、よく働きつつましくしとやかである。就職浪人中の、夫人のふたりの弟が台所で給仕をしている姿に家の中の上下関係を感じた。台所の電気コンロを見て、この国の近代化と森林保護のためには、電気の普及が不可欠だと感じた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	苗作りの技術の高さを感じた。安価で市場に出し、普及を図っている。果樹栽培の苦労は、日本も同じだろうが、ここでは、暖かい気候が味方だ。やる気のある農家が成功し、マラウイアン・ドリームを実現させてほしいものだ。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）・生徒との交流	寮の中は、劣悪な環境。こんな中で、高い国家試験合格率をあげて勉学にはげんでいる。涙が出そうだ。理数科に力を入れても、それを生かせる工業はまだまだの国だが、彼らが国を支えていく日が来ることを願うばかりだ。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）・生徒との交流	比較的自由な雰囲気の中で学習している。インタビューしたベラリカ・ロミーカ君。2時間かけて自転車で通学する彼は、長男のためか、家の農業を継ぎ、広めていくのが夢。ほとんどの子も将来の目標を持っていた。交流授業の図工と音楽は、とても楽しく、生徒たちも喜んでくれたのが嬉しい。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	マラウイの HIV／エイズの状況は大変深刻であり、近代化が進むにつれ、都市部での感染率が増えてきている。国家プロジェクトとしての取り組みの必要性を感じるが、先進国の援助が進まないのは、なぜだろうか。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	子どもの頃にテレビや写真で見たアフリカの写真がたくさん展示されていて、ちょっと前まではこんな生活だったのかと感慨深い。生と死、誕生から成人することを神聖な儀式で迎えている様子がわかった。こうやって、長い間、このアフリカで生命を育んできたのだろう。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	住血吸虫の問題さえクリアすれば、すばらしいリゾート地。ホテルで観た民族舞踊もハイレベルな芸能だった。観光地だけあって、地元のおみやげ売りたちは、人懐っこくややしつこい。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	中山氏から、マラウイの抱える貧困と援助の問題について、いろいろお聞きすることができた。私たちにできることは、まず、やはりこの現状を伝えることだろう。見たことのすべてを、同じ地球に住む人間として温かい目で伝えたい。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月24日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	富山県八尾町立杉原小学校	氏　名	岩脇　達典

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- マラウイの人々や隊員とのふれあいを通して、マラウイの国としてのよさを探る。
- マラウイの人々の生活や文化の多様性を肌で感じ、自分たち（日本人）との共通点及び相違点について考える。
- マラウイが現在抱える課題を追究し、様々な視点をもちながら自立のために必要な援助とは何か考える。
- 教師海外研修を通して、国際社会の中での我が国の立場や役割、課題について考える。そして、自分自身の生き方も振り返る。

1－2．その目的やねらいの達成度

- 自分から積極的に現地の人々や隊員の方々に語りかけたり質問をしたりして、生き方や価値観にふれることができるように心掛けた。実際に体験できるものについても意欲的に参加していくことができた。また、できる限りの写真を撮影し後の振り返りに生かすことができるようにもした。現地滞在の間の貴重な時間を有効に使うことができたと思う。
- 多くの人々とふれあう中で、また実際に自分の五感を働かせてマラウイの自然や文化を確かめることを通して、マラウイと我が国との共通点や相違点について理解し、決して自分たち日本人や日本の文化がスタンダードなものではないことや、人としての心の同一性について深く考えることができた。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- たとえ物やお金はなくてもマラウイの人々は、家族を大切にしながら生きている。家族を思う心や笑顔は国を越えて共通のものであると思った。
- ホームスティ先では熱烈な歓迎を受け大変嬉しかった。ホストファミリーの日本文化を積極的に知ろうとする態度から、マラウイの人々にとって異国である日本に対する尊敬の念を感じることができたのも、ホームスティで得た喜びの一つであった。
- マラウイの主食であるシマやローカルの酒を飲むことができたのもよい体験となった。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- 今回の研修には、静岡・三重・愛知・岐阜・福井・石川・富山からの参加者が集った。訪問先でのディスカッションや質問内容のレベルの高さ、学校訪問での積極的な参加姿勢はもとより、移動中のバス内やその日一日を振り返っての何気ない夕食時の会話にいたるまで、参加者の先生方の言葉や行動すべてから開発教育のみならず、教師としての夢と熱意が伝わってきた。それぞれが現場における教育のエキスパートであると感心させられた。
- スタッフの方々には心から感謝の言葉を申し上げたい。特に、同行してくださった甲斐さん、三島さんは、我々の就寝後も遅くまで翌日のためのミーティングを綿密に行ってくださるなど、アフリカから全員が無事帰国できたのは、お二人のお陰であると思う。

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

・ クラブ活動

ワールドクラブ「ＢＡＷＯ」と呼ばれるマラウイの盤ゲームのルールをマラウイ湖畔のカフェ店員に教えてもらった。ゲーム盤も買ってきたので、紙製の簡単なものを作成して、クラブの時間子供達に取り組ませたい。

・ 学級の時間

ホームスティ先で、マラウイ版チェワ語の「幸せなら手をたたこう」を教えてもらうことができた。朝の会や帰りの会の歌の時間に、ぜひ学級のみんなで元気よく楽しく歌いたい。

・ 道徳及び総合的な学習の時間

自分にとって一番大切な実践の時間になると思うが、道徳では国際理解を中心価値として扱う授業の中で、マラウイの国を通して人間として普遍であるものの美しさや大切さに気付かせたい。具体的構想として、まず初めにアフリカについて知っていることやイメージを出させる。次に、今回の研修で撮影した写真を効果的に提示し、一時的に子供達から「偏見」「差別」の意識を吐き出させたいと思う。その上で、とっておきの「素晴らしい笑顔」の写真を提示し、『なぜ、ものやお金がないのにこんなにも笑顔が素敵なのだろう』という発問を子供達にぶつけ、子供達の自由な話合の中から、本当の幸せとはなにかを考え、偏見のない見方で世界を見つめることのできる国際社会に生きる人間としての基礎を養いたいと考えている。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

・ 今回の研修では、訪問先それぞれに「夢」と書かれた色紙をお礼にお渡ししてきた。この言葉は、まさにＪＩＣＡの開発援助事業に携わる方々の毎日の努力の様子を、一言に凝縮したものではないかと思う。特に、大溝さん、家泉さんのお二人については、それぞれの支援や開発援助に対する考えを直接伺うことができとても勉強になった。今後もマラウイの人々の未来と夢と幸せのために、健康に留意されますますのご活躍を期待したい。今回の研修で、ＪＩＣＡからの真摯な援助姿勢を学ぶよい機会となったが、他国からの支援体制を伺うと、これはもちろん主観であるが、必ずしもマラウイの未来を考えたものにはなっていないのではないかという懸念がある。他国との十分な共通理解の上で、日本の事業というよりも世界からの事業の一パートとして我が国が何をなすべきかを考えていく必要があると感じた。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

・ 未だかつて訪れたことのなかったアフリカの大地を自分の足で歩き、五感を通し実に多様なことを体験できたことは素直に嬉しいことであり、今後の自分自身の価値観を大きく変える転換となることであろう。

・ 事前研修については、次年度からのことを考えると反省点が少なからずあったように思う。７月１８・１９日の両日に研修会が開かれたが、一週間前の直前というその時になって初めてお会いした参加者の方々もいた。その研修会で役割分担をしたが、多くの参加者から聞かれた声の中にもあったように、準備をしたり参加者同士でコミュニケーションをとったりするための期間があまりにも短かった。また、研修地における計画についても、未定であったり不明瞭であったりする点が多々あった。参加する側としては大変不安であったことは否めない。また、マラリアという危険な病気に対する情報も、出発前の帰国隊員

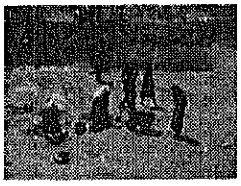
からの情報のみを頼りにしていたが、実際に現地専門家から実は油断ならないという話を聞き、参加者全員が大慌てをすることとなった。正確な情報収集のあり方が求められるところであろう。

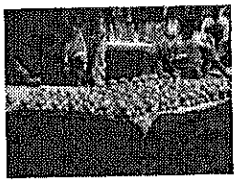
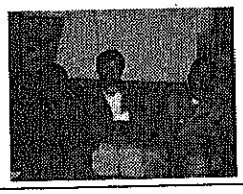
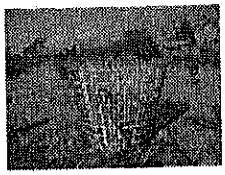
- 今回一番楽しみにしていたのがホームスティであった。ホストファミリーには言葉で表せないほどお世話になったが、残念なことが一つある。それは、自分を受け入れてくださった方が独身であったことである。一国の暮らしを知るためには家庭に飛び込むのが一番だが、あるときは妻として、またある時は母として家族のために尽くす姿を実際に見たかったのが本音である。様々な事情もあってのことであろうが、次年度に生かすとするならば、なるべく母親・子供のいる家がホームスティ先に選ばれるような計画をお願いしたい。
- 研修後に設けたメーリングリストの効果は絶大であった。研修前のみならず、研修後の情報交換の手段としても大いに役立つことと思う。

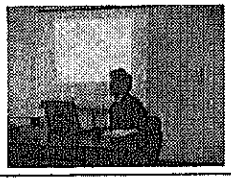
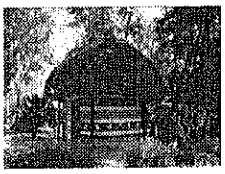
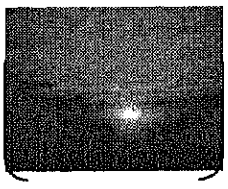
6．その他全般を通じての感想・意見など

- ほとんど事前の情報がない状態で日本を発ったが、もしも可能であったならば、十分に事前情報を得た上でたくさんのものを見たかった。6月上旬に派遣国が内定していたので、先に述べたメーリングリストがこの時期から既に機能していればよかったと思う。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学 	・ マラウイでは、中学校教員の多くが正式な免許を持っていないことに驚いた。「貧困」「教育」「健康」「産業」…どこから手をつければよいか難しい状況の中、教育に力を注ごうとする姿勢には胸を打たれるものがあった。図書室で熱心に学習を進める学生の真面目な態度を子供達に語りたい。
	小学校訪問と交流 	・ 我が国と同じようにゲスト・ティーチャーを招いていた。訪問先では、マラウイの子供達の生活に役立つ漁の仕掛けの作成方法を教える場面を見ることができた。我が国でゲスト・ティーチャーといえば、教科学習に直結する内容の人々をイメージしがちであるが、多様な有用性について考えてみる必要があると感じた。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察 	・ ここで出会った大溝さんは、今回の研修で忘れられぬ日本人の一人である。「吐き気がする程の貧困」。その言葉は、強烈に我々の耳に残った。「支援とは、金や物を与えることではない。」そのことに気付かせてくださった最初の人であった。また、訪問した村の隣村の女性達が自分たちも豊かになりたいとの願いから自力で地面を掘る姿に感動した。人間として本来あるべき姿の一つとして、幸せを求めて一生懸命に働く姿を、ぜひ今後の教材の一つとしたい。
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園ツアー（野生生物） 	・ 国立公園内の自然の美しさ、野生動物の力強さを目の当たりにした。アクシデントで昼食までの自由時間ができ、偶然にも若い隊員の方々と話すチャンスができた。彼らの真摯な姿勢は心から素晴らしいと思った。昔は人間と共存していた動物たちも、ここアフリカと言えどももはやこのように保護区へと追いやられていることを子供達に伝え、世界的に進む自然破壊の脅威についてもふれていきたい。また、世界各国で青春をかけて一国のために尽くす若者の姿もぜひ伝えたい。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発調査（Tilime 村、Tikorele 村、Mankhamba 村視察	・　先の大溝さんとはタイプこそ違うが、ここで出会った家泉さんからも、マラウイの国の未来に対する情熱を感じ取ることができた。また、訪問先の村で温かく出迎えてくれた現地の女性達の歌声は素晴らしかった。「現地にあるもので産業を興す。それを文化に。」そのことの重要性と同時に多くの課題についても家泉さんから伺うことができた。「まず身近にある物を使って」という考えは、小学校における理科教育や図画工作科教育、総合的な学習の中で大切にすべきことであると改めて振り返ることができた。何でも業者から購入した安易なものを使うのではなく、自分たちで材料や道具から考え作ってみるところから始める。この発想が大きな成就感へとつながっていくのではないだろうか。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会（隊員との昼食会を含む）	・　ここで出会った中小路・清水両隊員と同席のワークショップの中でも「物をあげるのは援助じゃあない」と、二人ともきっぱりと口を揃えて言い切ったのが印象に残った。若者達の熱い気持ちにふれるたびに、自分も教師として何ができるのか、何をやりたいと思っているのか自問自答するよい機会となっている。
	マーケット見学 	・　清水隊員の案内のもと、ロビのマーケットへと向かった。ここでは売り物が行儀よく並べられており、マラウイの人々の習慣の一つにふれることができた。昼間から飲酒を楽しむ人々。声を大にしてジテンジェ（現地女性のスカート）を売る姿。一生懸命に自転車修理に勤しむ男達。目にする物は日本と違っても、生きる姿は何処も同じであるということを、ここで撮影した多くの写真を通して子供達に強く感じ取らせていきたいと思う。
	現地人宅へのホームステイ 	・　今回の研修で一番楽しみにしていたのが、このホームスティであった。受け入れてくださったMr.JOSAMUに心から感謝したい。マラウイの生活文化を実体験を通してたくさん学びたかったが、ホストが日本文化のことをたくさん知りたがっていたので、日本の遊びや教育システムについて語る時間が多かった。スティ中にマラウイの主食であるシマ作りも体験させてもらうことができた。作り方は単純なので、クラブの時間にみんなで作りたいと思う。
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察 	・　山羊よけの柵の必要性を語る清水隊員の目は輝いていた。我が国ではポピュラーな「津軽リンゴ」をはじめ、様々な園芸種の普及に努力する若い隊員の方々に接することもできた。記憶に残っているのは、日本チームの援助により自立への自信をもつことができたマラウイの人々の言葉である。「もう日本人の皆さんなしでもやっていけそうだよ。」その言葉が一番大事なのである。「自立」について考えさせられた午前のプログラムであった。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）・生徒との交流	・　野原隊員の緻密な学校スタッフとの打ち合わせのお陰で、我々はとても楽しく有意義な交流の時間をもつことができた。日本の遊びを伝えることができ大変満足している。生徒達の素直な心に感動した。最近の我が国の生徒達の活気のない姿と比べると、マラウイの生徒達の方が幸せではないだろうかと思えてきた。また、生徒達は先生に対して尊敬の気持ちを決して忘れない。我が国の教育現場では最近失われ

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
		つつあるものが、ここマラウイには存在する。帰国後、同僚の教師に多くのことを語りたい気持ちでいっぱいになった。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）・生徒との交流	・　マラウイでの教科書配布率はとても低い。本や教科書をとても大切にしている学校の姿を見ることができた。授業中ではあったが、近所の子供達に我々のメンバーの一人がコーラをあげると、喧嘩もせず仲良く４人で順を決め少しずつ回し飲みをしていた。コーラはマラウイでは贅沢品の一つである。彼らのその様子をこっそりと撮影した。帰国後、マラウイの子供達の様子を伝える貴重な資料の一つとなりそうである。
	保健行政アドバイザーとの情報交換 	・　マラウイではAIDSが深刻な問題となっていることを、専門家の話を通して確認することができた。貧困層に感染率が多いと予想していたが、事実はその逆であった。小学生には、感染について説明するのは難しいことではあるが、病気と闘いながらも生活を送っている人々の姿から、AIDS感染者に対する偏見をなくすための教育の基礎は、工夫次第でできそうであるとの手応えを感じた。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学 	・　どの国にもそれぞれの歴史がある。マラウイも同様で民族間の幾多の抗争を経て、現在の町や村ができあがったことを館内の展示物を通して知ることができた。また、ここでは彫刻の土産物の出来が素晴らしく、作品につい見とれてしまった。マラウイでは、生活をかけて必死に木彫りをする人々も多く、作品を眺めながら作業する人々の気持ちに思いをはせていた。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策 	・　さすがは世界遺産に指定された場所である。吸い込まれそうになるほどの美しさであった。充血吸虫の危険がある恐ろしい湖であることは想像もできない。マラウイ湖の美しさを伝えて、世界遺産に興味関心をもたせ、自主的に世界中の世界遺産に目を向けることができたらなどと考えてみた。
	JICA現地関係者との懇親会（7/29のJICAマラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	・　初日にJICA事務所で、保健衛生面のレクチャーを受けた西崎さんは、何と同郷の富山県（大山町）出身だということを知って、ますます親近感を覚えた。使命感と責任感をもって任務を遂行しようとする姿には頭が下がる思いである。これまでの経歴と今後の夢についてお互い語り合った。「夢は必ずかなうもの、必ずかなえるもの」彼女の大切にしている言葉である。なるほどと思った。子供達にも聞かせてやりたい言葉である。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面 	・　今回の研修で撮影したデジタルカメラの写真は全部で７４８枚あった。自分でもたくさん写したと感心している。どれも思い出深いが、その中の一枚に、移動中のバス内から夕日を撮影したものがあった。世界中どこにいても、「今日」という日は時間の長さとして平等である。しかし、当然ではあるが過ごし方は人によって国によって千差万別である。世界各地で、「今日」が「幸せであった」と感ずる人は、何によってそう思うのであろう。幸せの「もと」は、物か、金か、あるいは人なのか、それとも心なのか・・・。子供達と一緒に追究していきたい。自分にとって永遠のテーマである。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月　　日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	津島市立西小学校	氏　名	賀島　美恵子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

「平均余命が４０歳未満の国がある」その事実を知ったとき、とても大きな衝撃をうけました。そのような状況にある国の現状を知りたいと思い、研修に参加しました。そこに暮らす人々の生活を垣間見ることを通して、アフリカの国は、食べ物もなく、子どもたちは学校へ行けないというステレオタイプの見方の奥にある現実を、実感を持って知りたいと思いました。

また、国際協力の現場に携わる人が、その活動にどのような生きがいや苦労を感じているのか、直接聞くことができるいい機会だと思いました。そして、人として大切にしていることは何かを知り、これからの自分の生き方や、国際社会を生きる子どもたちの生きる姿勢に生かしたいと思い、この研修にのぞみました。

1－2．その目的やねらいの達成度

見たり、聞いたりする現実は、想像していた以上のもので、『貧困』の何たるかを知りました。マラウィの厳しい生活をうかがい知り、自分の中ではじめて「抜け出せない“貧困の輪”」や「何もない国が最底辺から上がっていけない“貿易ゲーム”」を現実のものとしてとらえることができました。（

また、国際協力に携わるタイプも年齢も様々な人に会うことができ、限られた時間ではありましたが、活動を知り、話を聞くことができました。その思いに圧倒されてしまったり、事業の内容を理解するだけで精一杯だったりして、人として大切にしていることは何かということを言葉として聞くことはできませんでしたが、その姿勢やふとした言葉の中から感じることができました。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

私たちは多くのものに囲まれて生活しているけれど、本当に必要なものはそんなにたくさんいらないとシンプルな暮らしをしているマラウィの人を見て思い、物のありがたみがわからないような自分の暮らしを少し反省しました。何よりも大切なのは人との心のかかわり。この１０日間、たくさん握手をして、アイコンタクトをして、笑顔を交わして、とても優しい気持ちになりました。人を受け入れる気持ちを態度で表すことは素敵なことで、これから進んでやっていきたいと思いました。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

参加者・スタッフともとても個性的で、人として魅力的な仲間でした。皆さん、なにがしか大切にしているこだわりのようなものをもっていて、それが人としての味になっている気がしました。私も味わい深い人になりたいと思いました。皆さんが、メンバーに対しても、現地の人に対しても、自分から関わって関係を深めていく姿を見て、自分も心がけ、経験を広げたいと思いました。

3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

- 知った事実（貧困について、学校へ行けない子のことについて、）を問題提起のための導入につなげる。
- マラウィの人の暮らしぶりを自分や子どもたちの生活の振り返りにつなげる
- 協力隊や専門家の生き方を自分や子どもたちの生き方につなげる
- メンバーの人のポジティブな生き方を自分の生き方につなげる
- マラウィで味わった温かい気持ちを日本での自分の周りを温かくする気持ちにつなげる

4. ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

援助に関わる産業があるという事実は、ここへきてはじめて知りました。きれいごとだけですまない現実に、改めて援助とはと考えさせられました。だからこそ、「ものを与えることが援助ではない」「持続可能かどうか」という言葉が、相手の立場に立つからこそ出てくるものだということがわかりました。

教育・農業を中心とした第１次産業・医療に対する援助が、まず第一に必要であり、成果が期待できるということもわかりました。協力隊をめざす若者の存在は、日本も捨てたものじゃないという気持ちにさせてくれました。願わくば、それが個人の経験にとどまることなく、日本に戻ってから社会により還元されるシステムができあがると、日本の国際化や多様性を認めることにつながるだろうと思いました。

5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

途上国を知り、そこで活動をする人の思いを知ることが一度にできる機会はこれ以外にないと思います。現地で少しずつ行ったワークショップも、他の参加者の見方・考え方を知りよい情報交換になり、新しい視点が自分に加わり、よかったです。私は実践経験が少ないので、プログラムを考える際、参考になる考え方・手法をたくさん知りたいと思っています。事前研修を実践と結びつける意識が低かったことを反省しています。研修は、交通事情上移動に時間がかかり、じっくりと話を聞く時間が少なかったように思います。中山専門家の場合のように、実際現場を見た後、再度話を聞く機会があるとより理解が深まると思いました。デッザで協力隊の人と話をする時間がもう少し欲しかったことと、これだけ HIV が深刻な国なので、笠原さんの話だけでなく HIV 関係の施設を見学できると、これからの自分に役立ったのではないかと思いました。

6. その他全般を通じての感想・意見など

関係の方々のご尽力のおかげで、貴重な経験をすることができました。実際にマラウィに行くことによって、たくさんの資料を与えられたより多くのことを感じ・考えることができました。これが入り口となり、もやもやするものの答えを求めて、今度は自分で動いていけると思います。その原動力となるのは、あの笑顔、はだしの足、でこぼこの道を自分が知っているということだと思います。帰国後、オリンピックの入場行進の際、参加人数や民族衣装を今までと違ったことを目で見ている自分がいました。もちろんマラウィの登場を喜んだのは言うまでもありません。五輪休戦さえままならない世界に生きていることを意識しながら、でも、気負わず大切だと感じたことを実行していきたいと思いました。

仲間と出会った人に恵まれて本当に楽しい研修でした。ありがとうございました。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	・発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／※その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学視察	・ 無資格の教員が授業をしなければならない現状→“教育” ・ カナダも援助しており、通信教育を行っている→“援助” ・ 中古のコンピュータを活用してパソコン教育→“援助” ※条件は決してよくないが、なんとか質の高い教員を養成しよう・教師の質を上げようという取り組みがなされているのがわかり、同じ教師として心強いものを感じると同時に、より多くの教師を志す者がここに入学できるセカンダリーとの連携のようなものがあると、セカンダリー卒業後も職がないという状況が少しは緩和され、免許を持った教員も増えるのではないかと、素人考えで思った。
	小学校訪問と交流	・ NGOの活躍→“NGOの意味” ・ コミュニティの力で学校を作り、維持する。→“教育の意味” ・ ゲストティチャーとして、地元の人を活用する。→“地域の人材の活用” ・ エイズ防止の啓蒙活動→“日本でのエイズ教育” ・ 子どもがほんとうに生き生きしている。→“子ども時代に必要なこと・生き方” ※子どもたちは生き生きとしており、見ている自分までうきうきうれしい気持ちになった。そんな中、踊りの輪に自然に加わった金森さんは、素敵だった。「なんでもやってみる」と思って参加したが、自分からは体が動かなかった。終わって思ったのは、もっといっしょにいろいろやりたかったということ。同じ時を同じ体験をして過ごすことを、タイミングを逃さずやっていこうと思った。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	・ 大溝さんの援助に対する熱い思い→“現地の人のためになる援助とは” ・ 農業が基本→“世の中の仕組み” ・ 女性の力→“生き方” ・ 貧困のわな→“貧困” ・ 持続可能な支援について→“技術支援” ・ ものによる援助→“援助” ※将来像の描けないマラウィの貧困に身を投じ、ODAの現状・援助慣れ・マラウィ気質・遅々として変わらない現実に全身でぶつかっている大溝さんの言葉は、気迫に満ちていて、重い現実をつきつけられ、考えさせられるものがたくさんあった。共に働く現地の人と信頼関係を築き、生き方を認め合っている姿がすばらしいと思った。どんな状況の中でも、「自分のできることをまずしていこう」という姿勢は、共通するものだと思った。
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園ツアー（野生生物）	・ 野生動物はそんなにごろごろいるものではない→“環境保護” ・ 人の手が入る以前のマラウィの自然の状況→“開発”

月日	訪問先等	・発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／※その他感想
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発調査（Tilime 村、Tikorele 村、Mankhamba 村視察	・ 確実な技術移転→“技術支援” ・ 自信が次へつながる→“生き方” ・ マラウィの人のていねいな仕事ぶり→“働きぶり・生き方” ・ ビニールの活用法→“物・道具の工夫” ※実に穏やかな家泉さん。確実に役に立つ技術を伝えることによって、現地の人に信頼されているのがわかった。現地の人の表情から、自信をもって自分たちで活動を継続して進めている様子が伝わってきて頼もしく感じた。現地で手に入る物を工夫して使って技術移転しており、今後も続いていく形になっているのが本物の姿だと思った。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会（隊員との昼食会を含む）	・ 夢・志を持った生き方→“生き方” ・ 人との出会い、関わりを大切にしている→“生き方” ・ 共に生活することで、より深く現地の人のことをつかんでいる →“生き方・異文化理解” ・ 援助に対する考え方→“援助のあり方” ※表面的にいろいろ見たり、聞いたりして、なんだかもやもやしていたので、実際に生活している協力隊の人に聞きたいことがたくさんあって、何を聞いてもおもしろくて、時間が足りない気がしました。
	マーケット見学	・ 生活に必要なものが売られている→“消費” ・ 対面販売→“消費” ・ くしゃくしゃの５クワチャ→“お金” ※何を見ても生き生きとした生活が感じられ楽しかった。そこで、チテンジを買ったとき、店の人が５クワチャのおつりを手持ちで持っていなかった。５クワチャだからまあいいや、と思う自分と、言った値段だから、おつりはもらって当たり前と思う気持ちと。隊員の口ぞえで手にした５クワチャは、マラウィの土にまみれたくしゃくしゃのお札だった。お金の価値が違う国から来た自分たち。この金銭感覚で買い物をして、ズレはないのだろうか。
	現地人宅へのホームステイ	・ 家庭にあった持ち物→“豊かさ” ・ JICA の日本での研修→“もの” ・ 食事の支度・手伝い→“生き方” ・ 温度差→“習慣” ・ 小学生→“教育・子ども時代に必要なこと・生き方” ・ もてなしの心→“心のあり方” ※お世話になった家は、電気があり、家電もかなりそろっている家庭だった。何もないに違いないという思い込みの頭で行ったので、（テレビ２台、ラジオ、CD ラジカセ、ウォークマン、テトリス、卓上電子オルガン等々）を見、日本と同じだと、拍子抜けした気持ちになった。その裏には、マラウィ＝貧しい＝物がないとういステレオタイプの見方があり、当てはまらない状況をどう判断していいのか混乱している自分がいた。メンバーの中には、電気もないという家庭もあり、同じ地区内にかなりの差がある。この差は縮まるのだろうか。手に入れた物が、日本に研修に行ったがゆえであったとすれば、どのような人にそういう機会が与えられるのだろうか。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	・ 地道で着実な活動→“現地の人のためになる技術移転” ・ 実感させる→“教授法” ※環境の違う国に来て、本当に地道によく活動していると頭が下がる思いがした。自分のしてきたことが着実に実を結んでいるという確かな手ごたえを感じているようだった。生き方として是非紹介したいと思った。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）・生徒との交流	・ 子どもの反応は同じ→“教育” ・ 厳しい教育環境→“教育環境” ※こちらから伝えるだけでなく、子どもの思いを聞く時間や日本について質問する時間もあるといいと思った。最後に聞かせてもらった歌はいつまでも耳に響いていた。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）・生徒との交流	・ 子どもの違い→“教育” ・ 教育技術→“教育” ・ 校長室→“教育環境” ・ 看板のキャンドル→“教育の意味” ※授業で、ノートをとるように指導するまでが時間がかかったというように、大人数でずっときている子どもたちに学習の習慣づけをするのは、根気のいることだと思った。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	・ HIV感染率の高さ、医療事情の厳しさ→“保健・医療・生きる権利” ※その後の中山専門家の話も含めて、本当に厳しいマラウィの現状が改めてわかった。「マラウィの人はマラウィをどうしたいと思っているのか、それに沿うのが支援」という言葉が印象に残っている。「足ることを知る人たち」だというが、今のままでいいのだろうか。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	※マラウィの文化は何か？シマとお面と民俗的な風習か。チテンジも布を輸入できるようになってからの習慣なのだろうか。文化的な特徴がどうもよくつかめず、そこが知りたいと思っていたが、まだはっきりしていない。文字で歴史を残すことができたということは、とてもありがたいことだと思った。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	※すんだ湖はとてもきれいで、特に乾季の赤茶色の大地を見てきた目にはしみるように映った。美しい自然環境を残すと意味で、子どもたちに自然保護教育を行っているようで、いいことだと思った。住血吸虫を克服し、より多くの人がこの自然を味わえるといいと思った。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	※最大限の効果を挙げるよう、この研修のために多くの時間を割いて企画・実施してくださり、本当に感謝しています。日本とは事情が違う国で仕事をする醍醐味や苦労を聞かせてもらい、短い時間でしたが、交流の時間があり、よかったです。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面 （ワークショップ）	研修中のワークショップで語ったこと ・ マラウィの厳しさと豊かさに学ぶ ・ 知ることが第一歩 ・ 生きるためには、自信が大切 研修中、振り返ったり、視点を定めたりするワークショップを行ったことは、日程的にきつかったこともあったけど、意味があったと思います。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月13日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	名古屋市立長須賀小学校	氏　名	金森　美津子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

感受性豊かな子供達にあるがままの世界各国の様子を知らせることは、外国を正しく知り、子ども達がこれから歩む道を探求する上でも意義深いことだと思うと共に、我々大人の責任ではないかと思っている。

私は、小学生の国際理解教育の原点は、正しく現状を認識させる事だと思う。日本と比較しての歴史・文化・生活習慣の違いはいうに及ばず、子どもたちと同世代の生活状況を知らせる事で、今の自分の生活と関わらせて外国を身近に感じ、考える事ができると思う。

この研修で私自身の見聞を広めるのはもちろんのこと、マラウイ共和国の現状を私を取り巻くすべての人にきちんと伝えられるようしっかり見て体験してきたい。

1－2．その目的やねらいの達成度

多方面で現地の様子を見聞することは言うに及ばず様々な体験もでき大変有意義であった。それらをいかに授業やその他で生かしていくかが大変であるが、創意工夫のしどころである。進んで機会を作り伝えていきたい。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- 子どもの笑顔は最高
- あいさつの言葉のもつ重要さ
- バスに乗っている私たちに素敵な笑顔で手を振ってくれたこと
- 女性の働く姿

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- 皆さんとても親切
- 目的意識が同じなので協力し合えたこと
- ワークショップのプログラムを考えるのは大変。（三島さんは凄い！！）
- 皆さんの前向きな姿勢に感化させられたこと

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

研修で得たものを毎日の授業に生かしていきたい。子どもたちにこの目で見、耳で聞いてきたことのありのままを話し、真の意味で国際理解教育に役立てたいと思う。

職場の教職員や家族など私のまわりにいる様々な人々を巻き込んで、「幸せって何？」「本当の豊かさって何？」を問い掛けていきたい。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

今まで私の中には、開発援助事業がビジネスだという意識が全くなかった。しかし今回の研修で現地で活躍されているＪＩＣＡ職員の方から「ビジネス」の言葉をお聞きして、正直びっくりした。何も知

らない私が勉強不足なのだが・・。「ビジネス」というからには利潤追求がついてまわると思うがどのようにその部分を解決しているのか？マラウイでの開発援助事業が「ビジネス」として成り立っているのか？実情を理解していないまま感想のみを述べさせていただいたことをお許しいただきたい。

世界中には飢餓や病気などで生命の危機に遭遇している人々や地域のあることを充分承知していたつもりだったが、今回の研修で確信をもった。開発援助事業が真の意味で共存共栄の一助となるような事業運営を期待する。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

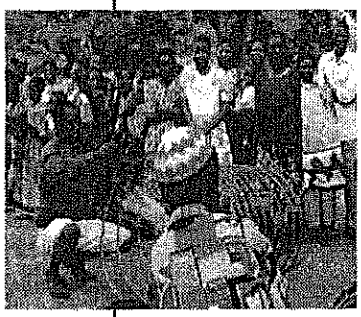
- 国際理解教育・開発教育の奥深さを体感することができたこと。
- 参加者との交流からネットワークを広げることができたこと。

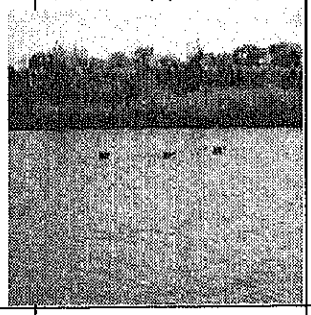
6．その他全般を通じての感想・意見など

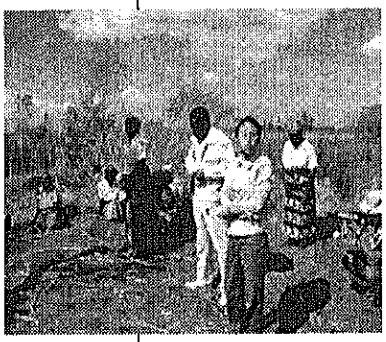
- アフリカへ行けるチャンスを与えていただいたことに感謝すると共に伝える責任を痛感。
- 現地で活動されている海外青年協力隊員やＪＩＣＡ職員の皆さんのご苦労や喜びを肌で感じ取ることができたこと。

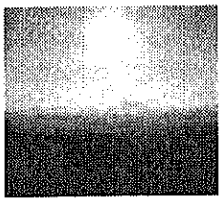
7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学視察	・レンガ作りの広いキャンパス。貧しい設備。 ・日本をはじめアメリカ、カナダなどの各国からの支援に支えられて運営。 ・体育教官として隊員が活躍中。 ・副学長のあいさつの中で支援に対する感謝の意がなかったことに違和感を覚えた。と同時に自立国家の道をしっかり歩みための人材育成に努めている学校のトップレベルに前向きの使命感が感じられなかったのは遺憾であった。
	小学校訪問と交流 	・子どもたちのパワーとあふれる笑顔に訪問者を温かくむかえる心を感じた。 ・地域社会の大人も巻き込んだ子どもたちによるＨＩＶ対策の取り組み（歌とダンスと劇とメッセージ）に飛び入り参加。 ・子どもを背負った若いお母さんとのふれあい。抱かせていただいた赤ちゃんの軽かったこと。この子達の未来が明るく開かれていくことを切に願って。 ・生きる力を育む指導の一環として、魚取りの道具の製作をその道のプロに指導を受け課外のクラブ活動でとりあげていたこは良い考えだと思った。子ども達も真剣に取り組んでいた。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	・大溝専門員の熱意あふれるお話にあいさつの言葉も忘れて聞き入ったしまった。現場で活動される苦労・苦悩がのそこ言葉一つ一つににじみ出ていた。 ・困難な状況にあっても自分の置かれている立場で情熱を持って仕事に打ち込んでいる様子を拝見することができ勇気と元気をいただいた。ぜひとも子どもたちに伝えていきたい。

		・視察した養殖現場は、女性ばかりの村であった。マラウイの男性諸氏は何を？と疑問に思ったのは私だけだろうか？特に赤ちゃんを背負って泥まみれになりながらため池の穴掘りをしていた女性たちを見たときは、思わず涙が出てしまった。何か変だ。今日は本当に心が動かされた一日であった。同じ女性として自分の生き方も含めて「本当の幸せ？」ってなんだろう。「人が生きる」ってどういうことなんだろう。これは答えの出ない問題かもしれないが、日本での生活では考える余裕のなかった本質的な問題を突きつけられたような気がした。
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園ツアー（野生生物） 	・広い国立公園。大自然の中で野生動物を発見するのは至難の業。それでも目を凝らして、わに・かば・水牛などを見つけたときは歓声が。 ・めずらしく象にも遭遇できたことは幸運としかいいようがない。 ・翌日朝ボートに乗ってかば探しに。元気よく大きな口を開けてくれたかばに大歓声。悠然とマラウイ湖を泳ぐかばの姿に時を忘れて。 ・公園内で偶然であった赴任前の隊員３名。うち一人がドマシ教員養成大学で体育の指導教官としての赴任とか。私も専門が体育なので少しばかりのアドバイスと参考資料を送ってあげることを約束して。元気で２年間がんばってほしいと心から思った。
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発調査（Tilime 村、Tikorele 村、Mankhamba 村視察 	・マラウイで初めて働く男性とその自信に満ちた対応振りにほっとしたのは私だけでだろうか？ ・マラウイでは３年前の飢きんの時、村々ではたくさんの餓死者が出て大変困ったそうだ。その記憶がまだ新しいうちに、乾期にも水を確保すれば農業ができるようにと始まった小規模灌漑技術開発プロジェクト。ＪＩＣＡ支援はあくまでアドバイス。決定権は農民自身に。現地調達できる材料を農民の創意工夫で灌漑用資材に活用しすばらしい水橋を作った。 ・一つの村の成功が他へ波及効果が大きい。講習会や学習会を実施しリーダーの育成が急務とか。 ・ＪＩＣＡのアドバイスを受け入れ、灌漑の技術を習得し収穫をあげることに成功した村のチーフ（長と言われなかったことに感激）は本当にうれしそうだった。 ・担当の家泉さんはマラリヤと戦いながら、2005 年 3 月で完結するやっと根付きはじめたこのプロジェクトを全国的に展開するため、また別のプロジェクトを組んでマラウイで活動されるそうだ。健康に気をつけて頑張ってほしいと思う。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会（隊員との昼食会を含む）	・マラウイ各地で活躍する隊員の方との懇談でマラウイの状況をより詳しく知ることができた。 ・マラウイ人のライフスタイルとの相違に支援指導も定着しないようで苦悩のほどが伝わってきた。そんな厳しい状況の中、与えられた任務の中で創意工夫し、少しでもマラウイのために働いている姿はとても輝いていた。 ・世界各地で働く日本の青年たちの活躍の様子を、子どもたち将来の夢につなげて授業で伝えていきたい。

	マーケット見学	・田舎のマーケット。せっけんから食べ物、靴にいたるまで生活必需品は何でも売っていた。お世辞にも清潔とはいいがたいが地元の人にとっては大切な物が手に入る場であるだけではなく、情報交換、交流の場として機能しているように思った。自転車タクシーを見たが生活の知恵を感じた。主食のシマをいただいたが食感が合わず困った。現地のお米も食べ慣れていないせいかいただけなかった。
	現地人宅へのホームステイ 	・ワクワクドキドキの一晩。すばらしい星空。今までに経験したことのない星空を見て感激。電気ガス水道のない生活。不便でしかたがないはずが？ランプの明かりで折った鶴は歪んでいたが3人の子どもたちは大喜びであった。何もない生活の中での精一杯の接待に温かい心を感じた。夜お母さんとの会話で、乳幼児1000人中220人は死んでしまうこの国で10人の子どもを無事に育て上げた苦労を聞いて思わず涙が。マラウイ紅茶を飲みながらのおしゃべりは尽きなかった。長男の「将来は大統領になるんだ。」と上手な英語で答えてくれた目は輝いていた。女の子は看護婦さんになる夢を語ってくれた。キリスト教信者の家族は食事前お祈りを。チュワ語なのでお父さんが英語に訪問者の旅の無事まで。何もない生活なのに温かい心がそこにあった。
8/4(水) ロビ→ リロングウェ 	ロビ園芸適正技術普及視察	・説明してくださる態度から専門分野で意欲と熱意を持って活動している様子がひしひしと伝わってきた。 ・地元にある材料で堆肥を作る苦労やその技術を農家に伝え継続させる心労は並大抵ではないだろう。隊員からマラウイ人を総称して「他力本願」という言葉が出たがそのことからも苦労のほどがしのばれる。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）、生徒との交流	・正直びっくりした。まるで牢獄のような教室、寮・・・私がもっていた学校のイメージが音を立てて崩れた。理科室も、体育館も図書室すらない教科書もない何にもない学校。あるのは学ぼうとしているマラウイの青少年の輝く目。先生の話を聞かないと授業についていけない。マラウイ人の先生の熱意あふれる授業にも頭が下がった。 ・デンマークの寄付によって作られて建物。3年前からは政府の補助金も途絶え生徒の授業料だけで施設管理を。充分なはずがない。日本の学校のすばらしさを実感。 ・視察団の中の高校の社会科の先生が黒板に世界地図を描いて社会科の模擬授業。自分たちが住むアフリカの国名を答えさせていったがよく知っていた。ちなみに日本の位置も分かっていてうれしかった。 ・「日本の遊び」で交流会。手品、けんだま、風船、などどれもめずらしいかったのか中学生がおおはしゃぎで、楽しく交流。お礼にすばらしいコスベルを聴かせていただいた。すばらしい音感でみんな楽しそうに歌っていた。

8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）、生徒との交流	・私服、カメラにネックレス、最初に訪問した学校とは雰囲気も生徒の顔つきも違っていた。地域によってここまで違うとは。 ・模範授業はみんなでサッカーとバレーボールを。体育の授業をまともに受けたことが無いようで私が準備運動の指導に入ったら元気よく大笑い。木で作った平面的なサッカーゴールにバレーの用具。何も無いところからの工夫はすばらしいと思ったが、はだしに厚底サンダルはどうみても運動するスタイルでは？運動のルールもよく分からないようで全く守られていなかった。 ・交流では折り紙を教えてあげたが、高校生のような背丈をした男子生徒がきれいな色の折り紙を奪うようにしてもらい必死で鶴を折っている姿はなんとも微笑ましい。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	・資料統計に基づく笠原さんのお話には説得力があった。ＨＩＶ感染の恐ろしさをまじまじと。アフリカの中でもマラウイは飛びぬけて感染率が高いとか？約１２００万人の人口なのに国内に１５０人しか医者がいなく、高額なＨＩＶ治療薬を手に入れることもできず。何から始めたら感染に歯止めがかかるのか？暗中模索状態だそうだ。街中いたる所にコンドームを置かなければいけないのが正常な状態には思えない。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	・マラウイの歴史、風俗、習慣などが年代順に写真や模型などを活用して分かりやすく展示してあった。大きな部族だけでも７つ、小さな部族を加えると３０近くなる多部族国家。これまでに大きな争いもなく。１番大きなチュワ族の言語を母語にしても何の問題も起きなかったところがマラウイらしい。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策 JICA 建設橋見学 	・ＪＩＣＡが建設した橋を見学。確かに大きくしっかりした橋だったが少しマラウイの風景には浮いているように感じた。もちろん地元の人には大変貢献しているのだろうが。 ・悪路の長距離ドライブは大変疲れる。これほど道路状態が悪いと物流は望めない。 ・湖の色をなんと表現していいか？深い深い青。とんでもない虫がいるようには見えない色。天然の水族館でたくさんの魚が気持ちよさそうに泳いでいた。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	・たくさんの方の支えでこの研修が成立し、すばらしい体験をさせていただいたことに深く感謝。 ・ＪＩＣＡに関わって仕事をされている方々は、みな熱い思いと自分の力を最大限発揮しようと取り組む強い意欲を感じた。 ・羨ましく思うと同時に、私も私の立場でベストを尽くす事を再認識できた２週間であった。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面 （マラウイの夜明けを見ながら）	浜辺にある大きな大きな自然の木。そこに暮らす村人達の日常生活の風景。とてものんびりした穏やかな日々・・・。 マラウイは時計のいらない国だ。ノイローゼで自殺する人がいない国だと聞くがうなづける。何にも無い。何にもしない。 良いか悪いかは別にして 「自然の中で、自然に生きる」本来の人間の姿なのかもかもしれない。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月　　日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	石川県立金沢中央高校	氏　名	河上　康一

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

テレビ番組、書籍、教材等で事前に学習している「アフリカ一般」および「日本の国際協力の現状」について、「マラウイ」という国家を訪問し、現地の人々の生活状況、ＪＩＣＡ関係者の活動などの実情に触れることで再確認、あるいは認識の修正を図る。

主眼点はまず、先進国との比較、都市と農村部との格差といった面から現地の経済状況を把握すること。次に教育現場の現状からこの国の将来像を経済および政治と関連させてとらえることにおく。

1－2．その目的やねらいの達成度

訪問前に把握していた「アフリカ一般」および「日本の国際協力の現状」に対する一般的知識がさほど的をはずしていないことは確認できた。

また今後授業を展開するにあたってそれらの知識をよりリアルに具体的に実証、説明できる事実が、主観に陥るという側面は完全に排除できないかもしれないが、多く得ることができた。

さらに今後、アフリカに関するいろいろなメディア情報に接するに当たり、それを把握・分析する上で参考となる体験もできたと思う。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

日本など経済先進国の人々と直接に接触する場、例えば「ホテル」「レストラン」「ＪＩＣＡ関係」で働く人々の間には「勤勉」「努力」といった価値観が浸透しつつある。一方で間接的情報ではあるが、政府関係者など上層部には外国からの援助依存による自立・自助努力の欠如の問題が指摘されていた。

その一方で国民の圧倒的多数である市井の人々からは、実際にことばをかわしたわけではないが、ただ「日常を生きる」という単純だが人間にとって大切で基本的な生き様が伝わってきた。

ありきたりの感想ではあるが、書類提出、会議の連続といった日本のオフィス労働者にありがちな仕事づけの生活とその価値の有無について一考させられた。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

先生方の豊かな感受性、メモをとる態度などの学習意欲に驚いた。

また物怖じしない積極的な行動力とプレゼンテーション能力の高さにも驚かされた。

それでいて、みなさん、学校現場にいるときとは違う姿をいい意味で見せていたように思う。

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

当然のことだが、経験を授業につなげることである。具体的には「現代社会」の約３分の１をしめる「国際社会と人類の課題」の部分の様々な基本的学習をすべてマラウイで経験、確認した事情とつなげて教材を構築し展開する試みをしたい。「世界資本主義」「グローバリズム」などと表現される国際経済の中に位置づけされる最貧国の問題、そこから派生する環境や食糧、人口の問題、さらには民族や人権、そしてアフリカに集中する内戦、戦争の問題などをとりあげる予定。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

援助の最前線で活動する人々のことばの重さと葛藤について学んだ。

達成感、使命感の裏側にある闇の面、すなわち「援助はビジネス」といった現実、「援助依存」の状況を打開できないでいるマラウイの政治状況に対する失望などである。自分の活動と努力は評価してほしいという気持ちはあるものの、マラウイの人たちに「そろそろ自分たちでやるから出ていってほしい」といってほしい気持ちもあるという葛藤には重みがあった。

ある意味仕方がないことではるが、ＪＩＣＡの青年協力隊員の活動の最初の動機付けはおそらく自分探しであったり、チャレンジ精神であると思う。しかしそれが二年間の活動で徐々にではあるがそのスタンスが自分からマラウイ社会への貢献に変わっていっているような気はした。

最後に提案。当たり前のことではあるが、援助されている側がたとえ謙虚さに欠けるきらいがあろうとも、援助している側は常に謙虚であろうとする姿勢を忘れないこと。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

プログラムや形にこだわらなくても実際の研修の体験が有意義であればほとんどの教員は思考し、内省し、それを表現していくもの。「シェアリング」は雑談の中からでも生まれる。

ワークショップという学習形態については正直、流行の一形態という性格は否定できないと思う。問題の安易な図式化を回避するには深い問題設定能力が不可欠でコーディネートする人には相当な力量が求められる。単なる「ことば」で表現させ意見を交換する場で活動が終わるならそれは「学習のうわすべり」であって、あとにほとんど何も残さない。それは教員が子どもたちに授業実践する場合も同じ。「構えないで学習する」という方法が大切、「アイスブレーキング」という手法もそれを意識しすぎると逆効果に陥る場合が多い。ことばは悪いが学習塾やカルチャースクールと動揺、研修がビジネスになるという先進国の現状そのものがアフリカなど途上国の現状、ライフスタイルとかけ離れているという問題を熟考した上で国際理解教育とその研修のありかたを再構築するとおもしろいものが生まれるかもしれない。

6．その他全般を通じての感想・意見など

特になし。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学視察	大学にコンピュータ環境を整備したＪＩＣＡ日本人教師の臨機応変で自由な発想と活動能力の高さ。 ハード面とソフト面、両者のバランスのとれた持続的援助の必要性。 国際協力の最前線で働く人間にとっての「思考力」の重要さ。
	小学校訪問と交流	現地ＮＧＯの計画、準備の周到さとそこにみる「国際援助」への期待。 現地集落の大人と子どもたちの外国人および先進的な外国文化、物品に対する異様なまでの好奇心。 現地の人々のセレモニーの高い表現能力。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	国際協力の最前線で働く人間の葛藤。現地の人々との人間的つながりと信頼感の醸成の大切さ。 水産養殖にかかわる女性たちの勤勉さ、および生活が徐々に安定、向上しているところから来るのか、その明るさ。 地に足のついた現場に本当に必要な援助の見極めの重要さ。
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園ツアー（野生生物）	野生生物に依存した観光開発の現状の不備。一方で環境に配慮した開発の必要性。
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発調査（Tilime 村、Tikorele 村、Mankhamba 村視察	地に足のついた現場に本当に必要な援助が現地の人々に与える力の大きさ。 灌漑技術を手に入れた現地の人々の喜びと、灌漑事業の自然的な広がり。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会（隊員との昼食会を含む）	ＪＩＣＡ青年協力隊員たちの活動内容の多様さ（教育、園芸、養鶏、農業一般など）、またチャレンジ精神の強さと自分探しへの渇望。 現地での日本人間の連絡・連携の強さ。
	マーケット見学	定期市の商品の多様性、現地の食材状況。マラウイ地方都市？農村部？の物価。 定期市に集う人々の表情の豊かさ。
	現地人宅へのホームステイ	現地人の間での居住状況の格差。 居住条件に関する整備の優先順位の問題。 客人を招いた場合の現地人の接客習慣の違い。 日本人、日本文化に対する関心の強さ。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	商品（換金）作物の栽培に関する日本人ＪＩＣＡ青年協力隊員の努力と活動の地道さ。 二年の活動期間の限界と長期的展望の重要性。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）、生徒との交流	現地教員の抱える知識水準、伝達技術の未熟さ。 学校施設（寮も含む）の貧困。 ハード面での国際援助における事後、継続メンテナンスの重要性。 生徒の真剣さと表情の豊かさ、明るさ。 生徒の音楽能力の高さ。 派遣日本人教師の多彩な表現力。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）、生徒との交流	ロビのチュワ中学校とほぼ同じ。 他に、サッカーを通じて感じた現地生徒の基礎的体力の高さ。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	サブサハラ地域におけるＨＩＶ問題の深刻さ。 ＨＩＶ問題拡大の要因の分析とその解明の困難さ。 ＊中山専門家（ドマシ教員養成大学）との意見交流 マラウイ国家の歴史的背景と教育現場からみた政治状況の現実。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学 マンゴチ橋視察	現在の日常風景からは観察できないチェワ族の伝統文化。 ンゴニ族、ヤオ族といった民族の存在とその習俗・通過儀礼の微妙な違い。 ＪＩＣＡの協力事業として行われたマンゴチ橋の建設とその重要な意義。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	世界遺産認定が与える今後の観光開発の可能性。 白人や日本人の観光に依存せざるをえない現状の厳しさ。 住血吸虫問題の認識と解決の重要性。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	ＪＩＣＡ関係者のパワーと明るさ。 今回の事業に関する準備計画、手配への感謝の気持ち。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	この報告書には残念ながら書き表せないほどたくさんの経験と勉強をさせていただきました。 ありがとうございます。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月22日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	岐阜県立恵那農業高等学校	氏　名	木村　友美

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

私にとっての研修のキーワードは「自立」です。現在、3年生のクラスを中心に英語の授業に行く機会が多いのですが、高校生活のなかで、「教員がやらせている。生徒はやらされている。」と感じていることがよくあります。何事も指示待ちで自分でやろうとするところまで指導できていない状態です。「なぜ英語を勉強する必要があるのか？外国へ行く機会なんてない。卒業できればいい」と感じている生徒も少なくありません。高校卒業後、私が彼らに期待するのは英語の能力でなく、英語を自分で勉強していこうと思っているかどうかです。英語嫌いの生徒にどう迫っていけばいいのか？それをマラウイの経験を通して私自身生徒と考えていきたいと思っています。具体的には、彼らの生活習慣・考え方を学び、違いを認識すると共にこれから私たちが、お互いにその違いを認め合い、どのようにこれから私たちが生きていくべきかを考える機会としたい。日本は先進国の中で一番家庭学習をしないで、テレビ等を見て過ごす子供が多いと聞いています。資源の無い日本がこれからどうなるのでしょうか？戦争を知らない私たちは間違いを繰り返さないために歴史を学んでいますが、憲法改正などこれから何がおこるかわかりません。世界が平和に共存していくためには、他の国のことについても学び、理解し自分で考え行動できる若者を育成する必要があります。私自身の無知をこの機会を通して現地の人と交流することによって自己啓発の場とするとともに、「生徒と共に考える場を提供する使命」を認識し、授業等を通して生徒に向けて考える場を提供する学びの場として参加させて頂きました。

1－2．その目的やねらいの達成度

日々、マラウイで過ごすたびに新しい発見がありました。良いこと、悪いこと、自分が知らなかったこと多くの発見をすることができました。この体験を本校の先生、生徒、家族に伝えることで少なからず興味を持ち考える機会を提供することができると思います。最初、私自身マラウイという国があることさえ知りませんでした。この研修を通して素晴らしい先生方や青年協力隊員・シニア隊員・ＮＩＥＤ・ＪＩＣＡのスタッフの方々と出会うことができ、様々な研修を通して共感できる機会があったことは私にとってかけがいのない貴重な経験だったと思います。

これから授業のなかでどのように考える機会を提供するかについては、もう一度自分自身、この研修を振り返り、考え教材を作りたいと思っています。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

私はマラウイに行く前に自分の中にアフリカはこういう国だというイメージを持っていましたが、その無知に気づく場面が多くありました。特に寄付に対する考え方・援助に対する考え方が大きく変わりました。また、青年海外協力隊の人達が実にきらきらと輝いて見えました。援助する側だと私は思っていましたが、日本のこれからの青年を育てるプロジェクトのねらいがあるのではないかと思いました。「自国に損になる援助はどこの国もしていない」という思いを強く抱きました。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

自分の気づかなかった視点を、研修中に共有できたことは、私にとって一番嬉しかった点です。それぞれの参加者がそれぞれの目的意識を持って、この研修に参加しており、それぞれの役割を協力しながら２週間過ごすことができました。普段、校種の違う先生方や他県の先生方と交流する機会はあまり無いですので、違った視点で気づきも多くありました。高校の先生方とは共有できる部分が多くありましたが、やはり校種が違う先生方と交流できたことはとても私にとって勉強になりました。またスタッフの方は細部にわたり私たちをサポートして下さり、体調管理など心がけて下さったことにはとても感謝しております。この研修だけではなくて、これからも交流を続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

身近なことでいえば、生徒に還元していきたいという思いが強くあります。他国の援助はあくまでその国の自立が目標となっています。ですが、実際問題としてそれはあくまで理想でなかなか難しい現状にあることがわかりました。日本という国を考えてみればわかることですが、いろんな意味で自立することは難しい現状があります。私の高校を考えただけでもそれはあてはまります。しかし、そのままで終わっていては何も始まりません。とくにこの現地研修を通して強く感じたのは答えではなくて考えていく過程が大事だと思いました。

できるだけ授業を通して、考えさせる場面設定を行っていきたいと思います。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

この研修を与えて下さったことにとても感謝しています。開発教育について自分自身考えることができました。ですがその一方で、これ以外にどんな活動が今現場の私たちができるのだろうか。という思いもあります。もちろんそれは私たち自身が考えていかなければならないとは思いますが、ＪＩＣＡの開発援助事業の問題点・課題等をスタッフの方々から聞く機会があると私たちも一緒に考えていくことができるのではないかと思います。答えはでないかもしれませんが、そういう機会があるとより一層、良いと思います。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

事前研修のおかげで目的意識が強くなった点は良かったとは思いますが、現地情報や現地の勉強会などをもっと前もって勉強する機会があったほうが良かったと思います。特に日本でインターネットを通して調べられる情報は限られていますし、現地生徒との交流会の準備など本当に直前で、皆さんと練習する機会もほどんど無く、ぶっつけ本番状態で行う場面が多くありました。もっと前もって準備することができていたらもっとより良くできると思います。

6．その他全般を通じての感想・意見など

何よりもまず、１６人全員が大きな病気をすることなく日本に帰ってこれたことは一番良かったと思います。様々なハプニングがありましたが、協力しあいながら解決することができました。かなりハードなスケジュールでしたが、それだけ学ぶ機会が多くあったと思います。特に現地の方の家にホームステイさせて頂いたことが一番、私のなかでは勉強になりました。正直、前の晩は不安でしたが、今、振り返ってみるともう少し現地の人と接する機会があったら、良かったなーと思いました。一人で行けたことで直接交流できたことを非常に嬉しく感じました。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学視察	青年海外協力隊の方の努力でコンピュータなど接する機会が多くなったことを知り、少しの努力が大きな成果に結びつくことを実感しました。小さな一歩から始めることが大切だと改めて感じました。
	小学校訪問と交流	エイズのことを考えて、自分たちで劇をしたりしている姿を通してエイズが身近だということと、教育の仕方にとても感動しました。こういうやり方はどこかの場面で使えるのではないかと思いました。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	論文ばかり書いていて現地のために本当に働いているのではない人がいるという怒りを込めた話を聞いて、援助が一つのｷｬﾘｱｰになっていることから、援助のあり方についてその点も含めて本音をもっと公表して考えていくべきだと思いました。
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園ツアー（野生生物）	サファリにいくことができなくて残念でしたが、新規隊員の方と交流する時間があり、私もこういう経験をもっと若いうちにしておくと良かったなーと感じました。
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模潅漑技術開発調査（Tilime 村、Tikorele 村、Mank-hamba 村視察	女性がよく働いている姿を見て、感心しました。日本で見たら小さい感慨で気にとめることも無かったと思いますが現地調達のもので作っていることと前向きに取り組んで成功している例を見て、自分達が良いと実感できれば物事が取り組んでいけるという実情もわかりました。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会（隊員との昼食会を含む）	長くマラウイに住んでいるとネガテイブな面が多く目に付くというところが印象的でした。私の滞在はわずか１０日間なのでなるべく自分の主観が入りすぎないように生徒達に伝えていく必要があると思いました。その点ではデータが大事だと感じました。
	マーケット見学	コミュニケーションがとても楽しく日本ではこんな雰囲気を味わえないと思いました。売っているものを見ること事態とても楽しかったのですが、寄付で送られた服もこういうマーケットで売られていることを知り新しい発見でした。
	現地人宅へのホームステイ	この研修が私にとって一番貴重でした。自分を振り返る良い機会にもなったと思います。私にしてくれた親切はどこかで返していきたいと思いました。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	農業に使う水は乾期に足りていない。そして雨期には水浸しという悪条件の中、工夫している点など経験に基づいたもので、経験は非常に大事だと思いました。失敗して学ぶことも多いことも改めて思いました。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）、生徒との交流	現地で日本語と書道で交流することができました。興味をもって取り組んでくれたことと一緒に何かをすることはとても良い経験になりました。生徒も素朴でとてもひとなつっこく楽しい時間を共有できました。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）、生徒との交流	生徒は大人びてみえました。カメラを持っている生徒もおり町の学校という気がしました。色んなタイプの学校があると改めて思いました。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	自殺する人もいるが、日本のような理由ではないということでした。もっとその点などを含めて知りたいことがありましたが、おおまかなことを学ぶことができました。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	今までの歴史や村ごとの儀礼的習慣などを見ることができ良かったと思いましたが、写真撮影できなかったことが残念でした。映像で伝えることができないので思い出しながらどこまで話せるのか？という思いがあります。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	世界遺産ということと病気(住血吸虫)ということで、自然美を感じながらも観光とは違った思いで訪問することが出来ました。初日のアドバイスで自然美と病気をいつも感じずにはいられませんでした。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	ＪＩＣＡでの皆さんの意見を聞きながら、改めてこの研修で得た多くのものを実感しました。またこの研修を通して知り合えた皆さんのすばらしさを改めて感じる良い機会になったと思います。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	私自身が非常に無力で人間的にも発展途上だと思いました。もっと自分自身も生徒と共に考え成長していきたいと改めて考える場となりました。そしてこの研修を通して、もののない豊かさ・幸せについて考える場面が多くありました。これが援助の仕方にも関わってくる大切な問題だと思います。それぞれ価値観は違いますが、自分なりに考えていきたいテーマになるかもしれません。